埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第378集

毛　呂　山　町

東 原 遺 跡

地方特定道路（改築）整備工事（主要地方道飯能寄居線）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

２０１１

埼　玉　県

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

東原遺跡全景　空中写真（上が南）

東原遺跡の紹介

東原遺跡は埼玉県入間郡毛呂山町の南部、葛川に開析された細長い台地上にあります。

今回の調査では、旧石器時代のナイフ形石器をはじめ、縄文時代中期の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡9軒、中・近世の道路跡や溝跡、錫杖頭と思われる青銅製品などが見つかりました。このことから、東原遺跡は、古くから生活の場として利用されていたことが分かりました。ただ、弥生時代から古墳時代のものは発見されていません。集団による農耕が行われていた時代ですが、周辺にもほとんどこの時代の遺跡は残っておらず、当時の技術では、生活を維持するだけの耕地を得られなかったようです。

それが奈良時代になって突如、東原遺跡や隣接する中尾遺跡などでムラが営まれだします。この事実は、本地域の歴史を考える上で重要です。何故なら、南側の日高市や飯能市を中心とする一帯には、霊亀二年（716）に各地の高麗人—朝鮮半島にあった高句麗から亡命してきた人々とその一族—を集め、高麗郡という新しい郡が置かれたからです。高麗郡の設置を契機として、周辺では高麗人が携えてきた高い技術による土地の開発が進み、平安時代にかけてムラが急増していきます。また、遺跡の近くには、高麗氏の氏寺と考えられる大寺廃寺も建立されます。

東原遺跡と中尾遺跡のムラが高麗郡に含まれるかどうか、現在のところ明らかではありませんが、その出現の背景には、高麗郡の設置が深く関わっていたと考えられます。

序

埼玉県では、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念に掲げ、「時間が読める道づくり」「安心と活力の道づくり」の推進に努めています。
主要地方道飯能寄居線のバイパス建設工事もその一環で、道路交通網の整備、地域間交通の円滑化、慢性的な交通渋滞の解消を図るため、計画的に整備が推進されてきました。また、建設予定地周辺には、先人たちの歴史を今に伝える数々の遺跡があり、これまでにも開発事業の実施に先立ち、継続的に発掘調査が行われてまいりました。

今回のバイパス建設事業地内にも、東原遺跡・中尾遺跡・新田東遺跡が隣接して存在し、その取り扱いについては、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、東原遺跡では奈良・平安時代を中心とする竪穴住居跡群などが発見され、土師器や須恵器などの食器類が出土しました。住居跡の分布状況から、集落跡は細長い台地の南側緩斜面に広がっていることが分かりました。本遺跡を含め、周辺に広がる古代の集落遺跡群は、地域の歴史を考えるうえで貴重な情報を発信するものといえます。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、ならびに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、飯能県土整備事務所、毛呂山町教育委員会ならびに地元関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成23年 3 月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長　藤 野 龍 宏

例 言

1．本書は、入間郡毛呂山町葛貫に所在する東原遺跡第１次・第２次の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番、及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

東原遺跡第１次（HGSHR）

入間郡毛呂山町大字葛貫513番地他

平成13年４月17日付け　教生文第５－35号

東原遺跡第２次

入間郡毛呂山町大字葛貫509番地１、２他

平成21年10月14日付け　教生文第２－41号

3．発掘調査及び整理報告書作成事業については、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

それぞれの委託事業の名称は、下記のとおりである。

発掘調査（平成12年度　第１次）

「県道飯能寄居線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査委託」

発掘調査（平成21年度　第２次）

「地方特定道路（改築）整備工事（東原遺跡外埋蔵文化財発掘調査委託）」

整理報告書刊行（平成22年度）

「地方特定道路（改築）整備工事（東原遺跡埋蔵文化財発掘調査（整理）業務委託）」

4．発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ－３に示した組織により実施した。

発掘調査事業は、第１次を鈴木孝之・福田聖が平成13年１月４日から平成13年２月28日まで、第２次を小野美代子・黒坂禎二が平成21年10月13日から平成21年12月25日まで、それぞれ担当・実施した。

整理報告書作成事業は劔持和夫が担当し、平成22年11月１日から平成22年12月28日まで実施した。平成23年３月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第378集として印刷・刊行した。

5．発掘調査における基準点測量は、第１次調査を朝日航洋株式会社、第２次調査を株式会社東京航業研究所に委託した。

6．発掘調査（第１次）における空中写真は、朝日航洋株式会社に委託した。

7．発掘調査における写真撮影は各担当者が行った。整理報告書作成における出土遺物の写真撮影は劔持が行い、福田聖の協力を得た。

8．出土品の整理・図版作成等は主に劔持が行い、渡辺清志の協力を得た。

9．本書の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、その他を劔持が行った。

10．本書の編集は劔持が行った。

11．本書にかかる諸資料は、平成23年１月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

12．発掘調査や本書の作成にあたり、毛呂山町教育委員会はじめ、関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡 例

1．遺跡全体におけるX・Yの数値は、第1・2次調査を通じ、日本測地系（旧座標）、国家標準直角座標第Ⅸ系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。

L－8グリッド北西基準杭の座標値・緯経度

X＝－8110.000m　Y＝－46080.000m

北緯35°55′33″　東経139°19′21″

2．グリッド名称は北西隅を基点とし、北から南へアルファベット（A・B・C…）、西から東へ算用数字（1・2・3…）をそれぞれ付し、両者を組み合わせ、「G－5グリッド」のように呼称した。

3．本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

ＳＪ…竪穴住居跡　ＳＤ…溝跡

ＳＯ…道路跡　ＳＫ…土壙

Ｐ…ピット・柱穴

4．本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。

遺構図

全体図…1/500・1/200

竪穴住居跡…1/60　土壙…1/60

溝跡・道路跡…1/80

遺物実測図

土器…1/4　金属製品…1/3

石器・石製品類…1/2・1/3・1/4

5．遺構断面図等に記した水準数値は、全て海抜標高（単位m）を示す。

6．遺物観察表に記した略号は、以下のとおりである。

胎土

A片岩　B角閃石　C長石　D石英

E赤色粒　F白色粒　G黒色粒

H針状物質　I小礫

焼成

Ⅰ良好　Ⅱ普通　Ⅲ不良

7．遺物観察表に記した残存率は、図示した器形における割合を目測した数値、（　）を付した法量は、反転実測や推定の数値である。

8．遺物観察表に記した色調は、全て農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』によった。

9．本書に掲載した地図類は、国土地理院発行1/25000・1/50000地形図、および毛呂山町都市計画図（1/2500）を編集・使用したものである。

目 次

巻頭図版
東原遺跡の紹介
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・報告書作成の組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 5
Ⅲ　遺跡の概要 …… 8
Ⅳ　遺構と遺物 …… 14
　1．住居跡 …… 14
　2．溝跡 …… 31
　3．道路跡 …… 36
　4．土壙 …… 36
　5．ピット …… 42
　6．グリッド出土遺物 …… 42
Ⅴ　調査のまとめ …… 46
　1．調査の成果 …… 46
写真図版

挿図目次

第１図　埼玉県の地形……3
第２図　周辺の遺跡分布……4
第３図　基本土層図……8
第４図　調査区位置図……9
第５図　調査区全体図……10
第６図　調査区全測図（１）……11
第７図　調査区全測図（２）……12
第８図　調査区全測図（３）……13
第９図　第１号住居跡・出土遺物……15
第10図　第２号住居跡・出土遺物（１）……16
第11図　第２号住居跡出土遺物（２）……17
第12図　第３号住居跡……19
第13図　第３号住居跡出土遺物……20
第14図　第４号住居跡……21
第15図　第５号住居跡・出土遺物……22
第16図　第６号住居跡……23
第17図　第６号住居跡出土遺物……24
第18図　第７号住居跡・出土遺物……25
第19図　第８号住居跡・出土遺物……27
第20図　第９号住居跡……28
第21図　第９号住居跡出土遺物……29
第22図　第10号住居跡……30
第23図　第１・２号溝跡……32
第24図　第３・４号溝跡……33
第25図　第７～９号溝跡・
　　第１号道路跡……34
第26図　第７号溝跡出土遺物……35
第27図　土壙（１）……37
第28図　土壙（２）……38
第29図　土壙・ピット・
　　グリッド出土遺物……40

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧表……5
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表……16
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表……18
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表……20
第５表　第５号住居跡出土遺物観察表……22
第６表　第６号住居跡出土遺物観察表……23
第７表　第７号住居跡出土遺物観察表……26
第８表　第８号住居跡出土遺物観察表……26
第９表　第９号住居跡出土遺物観察表……29
第10表　第７号溝跡出土遺物観察表……35
第11表　土壙・ピット・グリッド
　　出土遺物観察表……41
第12表　ピット計測表（１）……43
第13表　ピット計測表（２）……44
第14表　ピット計測表（３）……45

写真図版目次

巻頭図版　東原遺跡全景　空中写真

図版１　１　調査区南側全景(南東から)
　　２　第１号住居跡(南から)
　　３　第１号住居跡遺物出土状況(東から)
　　４　第１号住居跡カマド(南から)
　　５　第２号住居跡(西から)
　　６　第２号住居跡
　　遺物出土状況(１)(南から)
　　７　第２号住居跡
　　遺物出土状況(２)(東から)
　　８　第３号住居跡(南東から)
図版２　１　第３号住居跡カマド(南東から)
　　２　第３号住居跡遺物出土状況(西から)
　　３　第４号住居跡(東から)
　　４　第５号住居跡(南から)
　　５　第５号住居跡カマド(南から)
　　６　第６号住居跡(南から)
　　７　第６号住居跡カマド(南から)
　　８　第７号住居跡(南から)
図版３　１　第７号住居跡カマド１(南から)
　　２　第７号住居跡カマド１(掘り方)
　　３　第７号住居跡カマド２(西から)
　　４　第８号住居跡(南から)
　　５　第８号住居跡カマド(南から)
　　６　第９号住居跡(南から)
　　７　第９号住居跡カマド１(南から)
　　８　第９号住居跡カマド２(西から)
図版４　１　第10号住居跡(東から)
　　２　錫杖頭出土状況(南西から)
　　３　D－４グリッド土層断面(南西から)
　　４　第７～９号溝跡・
　　第１号道路跡(１)(北西から)
　　５　第７～９号溝跡・
　　第１号道路跡(２)(西から)
　　６　第７～９号溝跡・
　　第１号道路跡(３)(北から)
　　７　第７～９号溝跡・
　　第１号道路跡(４)(西から)
　　８　第７号溝跡土層断面(西から)
図版５　１　第１号住居跡(第９図１)
　　２　第１号住居跡(第９図２・３・５)
　　３　第１号住居跡(第９図４)
　　４　第２号住居跡(第10図２・３)
　　５　第２号住居跡(第10図５)
　　６　第２号住居跡(第10図６)
　　７　第２号住居跡(第10図７)
　　８　第３号住居跡(第13図13)
図版６　１　第２号住居跡(第10図１)
　　２　第２号住居跡(第10図４)
　　３　第３号住居跡(第13図２)
　　４　第３号住居跡(第13図３)
　　５　第３号住居跡(第13図４)
　　６　第３号住居跡(第13図６)
　　７　第６号住居跡(第17図５)
　　８　第７号住居跡(第18図１)
　　９　第９号住居跡(第21図４)
　　10　第９号住居跡(第21図５)
図版７　１　第３号住居跡(第13図１)
　　２　第３号住居跡(第13図５・７・８)
　　３　第３号住居跡(第13図９・11)
　　４　第３号住居跡(第13図10・12)
　　５　第５号住居跡(第15図１)
　　６　第６号住居跡(第17図１)
　　７　第６号住居跡(第17図３)
　　８　第７号住居跡(第18図２～６)
図版８　１　第７号住居跡(第18図７)
　　２　第８号住居跡(第19図１)
　　３　第８号住居跡(第19図３)
　　４　第８号住居跡(第19図４～７)

5　第 9 号住居跡(第21図 1)
6　第 9 号住居跡(第21図 3)
7　第 9 号住居跡(第21図 6 ～ 9)
8　第 9 号住居跡(第21図10)

図版 9　1　第 6 号土壙(第29図 1)
2　第 6 号土壙(第29図 2)
3　第 6 号土壙(第29図 4)
4　ピット・グリッド(第29図 5 ～10)
5　グリッド(第29図11)
6　グリッド・ピット(第29図12)
7　グリッド(第29図13)
8　グリッド(第29図15)

図版10　1　第 1 号住居跡(第 9 図 7)
2　第 2 号住居跡(第11図 8 ～19)
3　第 2 号住居跡(第11図20～31)
4　第 7 号溝跡(第26図 1)
5　第 7 号溝跡(第26図 2)
6　第 7 号溝跡(第26図 4)
7　第 7 号溝跡(第26図 5)
8　第 7 号溝跡(第26図 6)

Ⅰ　発掘調査の概要

1．発掘調査に至る経過

埼玉県では、「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」における「総合交通体系を整備する」という基本目標に基づき、本県の活力を高め、県民誰もが快適かつ安心・安全に利用できる公共交通網や道路網の整備を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、こうした県が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

主要地方道飯能寄居線建設事業に伴う埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、平成11年２月19日付け道建第635号で県道路建設課長（当時）から照会があった。

県文化財保護課（当時）では、平成11年５月26日～27日に試掘による確認調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成11年７月24日付け教文第411号で次の内容の回答を行った。

１　埋蔵文化財の所在
　名称：東原遺跡（№26－031）
　種別：集落跡
　時代：平安
　所在地：毛呂山町大字葛貫504－２他
２　取り扱いについて
　別添地図上で埋蔵文化財が確認された範囲については、工事計画上、やむを得ず上記の埋蔵文化財の現状を変更する場合、事前に文化財保護法第57条の３の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

道路建設課と文化財保護課は、埋蔵文化財の保存について協議を重ねたが、現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることになった。また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託することになった。

埼玉県知事から提出された発掘通知（文化財保護法第57条の３：当時）に対する県教育委員会教育長からの勧告は、平成12年９月14日付け教文第４－404号で通知した。

発掘調査は２回に分けて実施された。

１次調査（平成13年１月４日～２月28日）

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届（文化財保護法第57条１項：当時）に対する県教育委員会教育長からの指示は、平成13年１月９日付け教文第２－99号で通知した。

２次調査（平成21年10月13日～10月30日）

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届（文化財保護法第92条１項）に対する県教育委員会教育長からの指示は、平成21年10月14日付け教文第２－41号で通知した。

（生涯学習文化財課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

東原遺跡の第１次調査は、平成13年１月４日から同年２月28日まで、1,500㎡を対象に実施した。１月初旬、調査区に囲柵を施した後、重機による表土除去、事務所設置を行った。表土除去の後、人力による遺構の確認・精査を開始し、順次土層断面図・平面図・遺物出土状況図の作成・写真撮影を行った。精査終了に伴い、２月上旬には空中写真撮影、下旬には調査区の埋め戻し・事務所撤去・事務手続き等を行って調査を終了した。

第２次調査は、平成21年10月13日から同30日まで、同様の手順で148㎡を対象に実施した。

（2）整理報告書作成

上記の調査に係る整理・報告書作成作業は、平成22年11月１日から12月28日まで実施した。遺物は水洗・注記の後、接合・復元を行った。復元した遺物は実測・トレース・採拓し、印刷用の図版に組んだ。また、12月上旬には図版用の写真を撮影した。発掘調査で記録した各種の図面は、照合・修正を加えた第二次原図を作成のうえ、コンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いてトレースし、印刷用の図版を作成した。12月下旬までに原稿執筆・編集を終え、印刷業者を選定して入稿した。３回の校正を経て、平成23年３月末に報告書（本書）を刊行した。

なお、図面や写真等の記録類や遺物は、12月末に整理・分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成12年度（発掘調査　第１次）

理事長	中野健一	**調査部**	
常務理事兼管理部長	広木　卓	調査部長	高橋一夫
管理部		調査部調査副部長	石岡憲雄
管理部副部長	関野栄一	主席調査員（調査第三担当）	小野美代子
主席	阿部正浩	統括調査員	鈴木孝之
		主任調査員	福田　聖

平成21年度（発掘調査　第２次）

理事長	刈部　博	**調査部**	
常務理事兼総務部長	萩元信隆	調査部長	小野美代子
総務部		調査部副部長	礒崎　一
総務部副部長	昼間孝志	調査監兼調査第一課長	金子直行
総務課長	田中雅人	主査	黒坂禎二

平成22年度（報告書作成）

理事長	藤野龍宏	**調査部**	
常務理事兼総務部長	萩元信隆	調査部長	小野美代子
総務部		調査部副部長	昼間孝志
総務部副部長	金子直行	調査監兼整理第一課長	劔持和夫
総務課長	田中雅人		

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

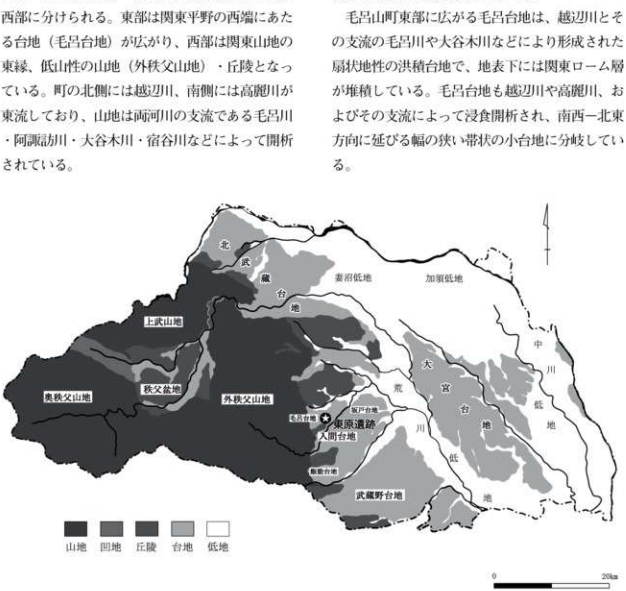
東原遺跡は、JR八高線毛呂駅の南東約1.5kmの入間郡毛呂山町葛貫地内に所在する。

毛呂山町は埼玉県の南西部、関東山地と関東平野が接する部分に位置し、東は坂戸市、南は日高市、西は飯能市・越生町、北は越生町・鳩山町に囲まれている。葛貫は町の中央最南部にあたる地区で、南は日高市と接している。

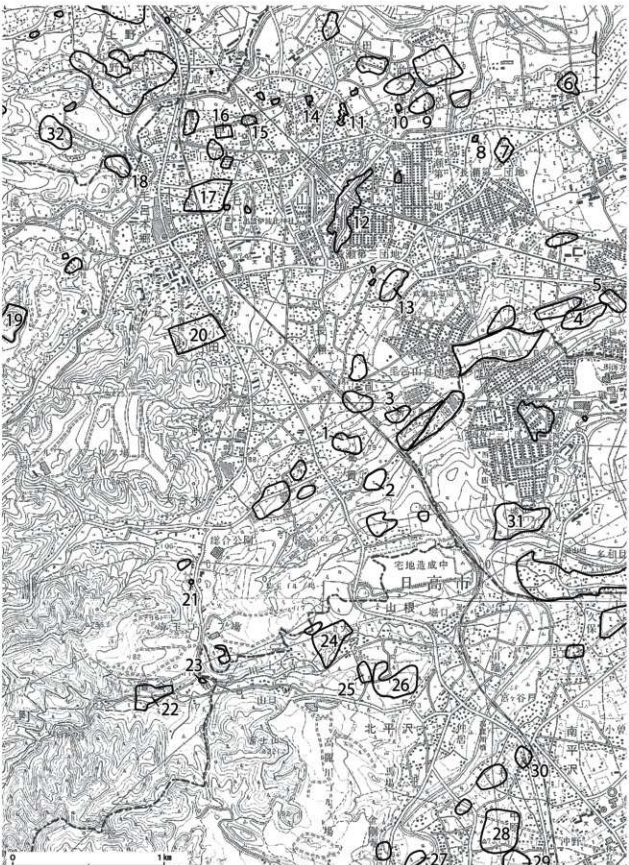
地形的には、町のほぼ中央を南北（宿谷ー毛呂本郷）に結ぶ八王子ー高崎構造線を境に、東部と西部に分けられる。東部は関東平野の西端にあたる台地（毛呂台地）が広がり、西部は関東山地の東縁、低山性の山地（外秩父山地）・丘陵となっている。町の北側には越辺川、南側には高麗川が東流しており、山地は両河川の支流である毛呂川・阿諏訪川・大谷木川・宿谷川などによって開析されている。

標高は山地で500mを測り、東へ向け次第に低くなり、遺跡の位置する葛貫の南側丘陵（毛呂山丘陵）で150～100mとなり、坂戸市に接する西大久保地区の毛呂台地で45mほどとなる。山地・丘陵・台地に比して低地は少ないながらも、越辺川とその支流の大谷木川流域にやや広い分布が認められる。また、葛貫付近の台地を開析しながら高麗川に合流する葛川流域では、川に沿って細長く形成された低地が延びている。

毛呂山町東部に広がる毛呂台地は、越辺川とその支流の毛呂川や大谷木川などにより形成された扇状地性の洪積台地で、地表下には関東ローム層が堆積している。毛呂台地も越辺川や高麗川、およびその支流によって浸食開析され、南西ー北東方向に延びる幅の狭い帯状の小台地に分岐している。



第１図　埼玉県の地形


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
宅地造成中
日高市
山根
北平沢
南平沢
0
5 km
1:25000

第 2 図　周辺の遺跡分布

第1表　周辺の遺跡一覧表

No.	市町村	遺跡名	時代	No.	市町村	遺跡名	時代
1	毛呂山	東原遺跡	平安	17	毛呂山	毛呂城跡	南北朝・戦国
2	毛呂山	中尾遺跡	平安	18	毛呂山	竹ノ内遺跡	縄文（中）・南北朝
3	毛呂山	本社遺跡	縄文（中）・古墳（前）・奈良・平安	19	毛呂山	亀ヶ谷山城	
4	毛呂山	山田遺跡	縄文（前）・平安	20	毛呂山	毛呂氏館跡	室町
5	毛呂山	沼下遺跡	平安	21	毛呂山	岩沢前遺跡	室町
6	毛呂山	八反田遺跡	縄文・古墳	22	毛呂山	宿谷氏館跡	平安
7	毛呂山	西原遺跡	平安	23	毛呂山	山根六角塔遺跡	南北朝・室町
8	毛呂山	野久保遺跡	平安	24	毛呂山・日高	大寺廃寺	奈良・平安・鎌倉・南北朝
9	毛呂山	五反田遺跡	縄文（中）・平安	25	日高	小別当遺跡	平安
10	毛呂山	西本遺跡	古墳	26	日高	天神峰遺跡	縄文（中）・奈良
11	毛呂山	伊勢原遺跡	古墳	27	日高	滝ノ前遺跡	
12	毛呂山	伴六遺跡	平安	28	日高	諏訪林遺跡	平安
13	毛呂山	塚場山遺跡	縄文（中）・古墳（前）	29	日高	原ノ上遺跡	平安
14	毛呂山	総庭遺跡	縄文・平安	30	日高	和田遺跡	縄文・古墳
15	毛呂山	村田和泉守館跡		31	坂戸	城山遺跡	縄文（中）・戦国
16	毛呂山	斉藤氏館跡		32	越生	御堂ヶ谷戸遺跡	縄文（中）・古墳

飯能寄居線バイパス建設工事に先立って調査された東原・中尾・新田東の3遺跡は、この毛呂台地上に縦列状態で隣接している。しかし、指呼の間にあるとはいえ、遺跡間には葛川支流の形成した低地が入り込むため、立地としては分岐して隣り合う別々の小台地上となっている。3遺跡近辺の標高は85m前後であるが、台地としては他の地域より高くなっている。

遺跡の所在する葛貫地区（旧葛貫村）の地勢について、江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』は、「一體は山に傍し村なれど、村内には却て山と云べきものはなし」と記し、明治八年（1875）以前の様子を記した『武蔵国郡村誌』は、「東北は平坦にして西南は山巒連亘し樹木処々に欝葱す」と記している。また、後者は村の地味が「色赤黄相混し小石を錯ゆ稲麦に適せす」、税地は「田$\frac{七反七畝}{}$十畑$\frac{五反二畝}{}$十$\frac{五畝}{}$」であるとする。課税対象地ではあるが、畑地（およそ9,100㎡）に比して田（およそ1,700㎡）がかなり少ない状況は、明治十四年（1881）、参謀本部陸軍部測量局測量の迅速測図上で確かめることができる。描かれた田・水田は周囲の村々も含め、その殆どが上述の狭い低地部、それもごく一部に限られている。

さらに『武蔵国郡村誌』は、物産として「生太織$\frac{五十}{}$炭$\frac{百貫}{}$」を挙げ、民業は「男は農業焼炭を専とし女は耕織を専とす」と説くなど、かつての葛貫村が農・林・蚕を主産業とする農山村であったことを教示している。

2．歴史的環境

前項で触れたように、東原遺跡の所在する毛呂山町は山地－丘陵－台地への急激な地形変化と、これに伴う植生、土地利用状況の変化に富んだ地域となっている。ここに暮らした人々の足跡も、旧石器時代以降、時代による濃淡はあるにせよ、現在まで連綿と刻まれ続けてきた。

毛呂山町や南隣する日高市の遺跡では、特に縄文時代中期と奈良・平安時代にピークが認められる。縄文時代については、中期の大規模集落跡である新田東遺跡の報告書（平成23年度刊行予定）に譲り、ここでは、東原遺跡及び南隣する中尾遺跡の主体をなす、奈良・平安時代の歴史的環境について概観することとしたい。また、中世以降の葛貫について付言しておく。

（1）高麗郡の設置

「辛卯、以駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七国高麗人千七百九十九人、遷于武蔵国、始置高麗郡焉。」『続日本紀』霊亀二年（716）五

月十六日条。

この高麗郡の建郡は、当地域における古代史上、最も重要な出来事である。

高麗郡は現在の日高市を中心に、小畔川流域の飯能市と坂戸市西部をも含む地域に想定されている。律令時代は高麗郷・上総郷の 2 郷からなる小郡で、郡の北～東～南は入間郡が取り巻くように広がっていた。

本遺跡の所在する毛呂山町葛貫は、江戸時代には入間郡葛貫村であり、村の南端が高麗郡（平沢村）との郡堺であった。古代においても、毛呂山町一帯は入間郡高階郷に比定する考えがあるが、本遺跡を含めた高麗川左岸、及び葛川流域における近年の発掘調査成果は、高麗郡の範囲認定に再考を促すものとなっている。

（2）集落遺跡

集落遺跡の分布をみると、高麗建郡以前に希薄であった小畔川流域の遺跡は、奈良～平安時代に激増する。日高市では常木久保遺跡・稲荷遺跡・神明遺跡・宮ノ後遺跡・大黒ヶ谷戸遺跡・道光林遺跡・中王神遺跡・王神遺跡・拾石遺跡・古道遺跡・堀ノ内遺跡・若宮遺跡等々が分布する。このうち、常木久保・稲荷・神明の 3 遺跡では、8 世紀第Ⅲ四半期～9 世紀第Ⅳ四半期を中心とする住居跡54軒や井戸跡 3 基、道路遺構等が検出され、多量の須恵器のほか、常総地方の土師器甕や灰釉陶器、瓦などが出土している。また、拾石遺跡では 8 世紀中葉から 9 世紀前半の住居跡46軒、掘立柱建物跡 6 基、井戸跡14基、道路遺構等が検出され、石製の丸硯や巡方、耳皿・漆紙、「家長」「南家」などの墨書土器が出土している。

こうした現象から、高麗郡設置に際しては入間郡の管掌・保護育成のもと、まず入間郡家（川越市霞ヶ関遺跡）所在地や、郡司の拠点大家郷（鶴ヶ島市以西）に隣接する高萩地区で集落形成が始まったといわれている。

高麗川右岸では、日高市で助殿林遺跡（28）・原ノ上遺跡（29）、やや下流の坂戸市で天神社遺跡・大家小学校遺跡が挙げられるが、遺跡数は小畔川流域に比し極端に少なく、両河川の中間部(坂戸台地）は空白域となっている。

毛呂山町でも、前代には空白であった台地奥部に分布が認められるようになる。高麗川左岸および葛川流域では、東原遺跡（1）・中尾遺跡（2）・本社遺跡（3）が85ｍ前後と標高の高い尾根状の台地に立地し、一つの遺跡群を形成している。下流部には沼下遺跡・延命寺北遺跡・宮脇遺跡・前通遺跡・築地遺跡・まま上遺跡・上殿遺跡・表A遺跡・表B遺跡・船原前遺跡等が、55～45ｍほどと標高の低い平坦化した台地上に立地する。

築地遺跡とまま上遺跡からは、「王」「乙」字を含む多量の墨書土器をはじめ、灰釉陶器・石製丸硯・相模系土師質坏などが出土したほか、一辺7～10ｍにおよぶ複数の大形竪穴住居跡も検出されている。このことから、両遺跡は一体の集落跡であり、9 世紀中葉から後半には拠点集落になっていたと考えられている。

越辺川流域の遺跡は下流の坂戸市寄りに多く、大類・川角・西戸といった古墳群やこれを形成した集団の集落が存在するなど、前代からの一拠点地域を形成している。また、台地奥部の確実な遺跡としては、大谷木川左岸に伴六遺跡（12）を挙げるに止まる。

（3）寺院跡等

高麗郡には古代寺院跡が 3 ヶ所で確認されている。それは、①女影廃寺（若宮遺跡の一部）：日高市高萩の小畔川流域台地上。②高岡廃寺：同市清流の高麗川左岸丘陵上。③大寺廃寺（24）：日高市山根と毛呂山町葛貫にまたがる宿谷川左岸の丘陵上。3 廃寺である。

女影廃寺は 8 世紀第Ⅰ四半期～同第Ⅱ四半期の建立で「郡寺（官寺）」的性格の寺院とされ、近隣に王神遺跡・拾石遺跡・古道遺跡・堀ノ内遺跡・若宮遺跡などの大規模集落が密集する。高麗郡

の郡家跡については明らかでないが、同廃寺の近辺に存在するのではないかと考えられている。

高岡廃寺は、8 世紀第Ⅲ四半期という出土遺物の年代が合致することから、高麗氏系図にある天平勝宝三年（751）創建の勝楽寺に比定されている。同系図によれば、勝楽寺は僧勝楽の遺骨を弟子の聖雲が納めた寺であることから、「菩提寺（私寺）」的性格の寺院とされている。山裾には同廃寺の瓦を製作した高岡瓦窯跡がある。

大寺廃寺は 8 世紀第Ⅱ四半期の建立で、高麗氏の「氏寺」的性格の寺院と考えられている。区画施設は未確認ながら、堂塔を備えた本格的寺院であったらしい。北方に位置する東原・中尾両遺跡に近く（東原遺跡から約1.2㎞、中尾遺跡から約 1 ㎞）、住居跡からは同時期の瓦が出土するなど、関連性が窺える。

3 廃寺は、建都間もない 8 世紀の前半～中頃に次々と建立されていったが、瓦が葺かれるなど、その盛期は 9 世紀代であるとされている。

なお、新設の高麗郡に『延喜式』神名帳登載社、いわゆる式内社は見られないが、入間郡には五座が挙げられている。このうちの一座、出雲伊波比神社は毛呂山町に鎮座する。同社は天平勝宝七年（755）に官社に預かり、神護景雲三年（769）には班幣が滞っていることを怒る祭神の祟りで、入間郡の正倉四宇を焼くという御神火事件で著名である。しかし、中・近世には出雲伊波比という社号は忘れられ、茂呂（毛呂）明神・飛来明神・八幡宮などと呼ばれるようになっていた。

これらの寺院や式内社は、外秩父山地の東縁部に点在することから、古代には幹線道が走っていたのではないかとする考えもある。一方、毛呂山町の東部には、中世の鎌倉街道上道が南北に貫いている。今次の調査はバイパスの新設工事に伴うものであったが、元の飯能寄居線に沿った道は、鎌倉街道上道の古道との伝承もある。おそらくこの山麓に沿った南北ルートは、古代以来、重要な交通路の一つであったのだろう。

（4）中世以降の葛貫

「葛貫」について、江戸時代の『新編武蔵風土記稿』はこれを「くずぬき」とし、明治時代の『武蔵国郡村誌』は「つづらぬき」としている。現在は後者の名で呼ばれている。

前書は葛貫村の由来を、「【太平記】に葛貫大膳亮と云る人をのす、此等もし此地に住し、在名をもて己が氏とせし人ならずや、さあらんには舊きよりの村名なることしるべし」としている。『太平記』は、後醍醐天皇の鎌倉幕府討幕計画から足利義詮の死まで記された南北朝期の軍記で、1370年代の成立とされる。『新編武蔵風土記稿』がいうように、葛貫大膳亮なる人物が当地に居住して地名を氏の名としたならば、遅くも14世紀後半には葛貫の名が存在したことになる。

中世の毛呂山町からは、毛呂氏や宿谷氏といった鎌倉時代の有力御家人を輩出している。毛呂季光は早くから源頼朝に仕え、のち豊後国司を拝命、奥州藤原氏の征討にも従軍した。葛貫氏についてはよく分らないが、これも当地を本貫とする武士の一族であったのだろう。

東原遺跡の西側には鎌倉街道上道の古道が通っていたとの伝承があり、調査ではこれに合流するのではないかと思われる 15 世紀以前の道路跡や溝跡が検出されている。また、遺跡の北には嘉元四年（1306）銘の板石塔婆も現存しており、中世には葛貫が要路上の村落であったことが窺える。

戦国時代になると、一帯は小田原北条氏の支配下に組み込まれる。永禄二年（1559）作成とされる『小田原衆所領役帳』には、「左衛門佐殿知行」として「百四拾六貫文六百三十六文　河越三十三郷　多波目葛貫　卯検地」と載る。左衛門佐は北条氏綱の子、氏堯（氏康の弟）といわれている。多波目は葛貫南東の高麗川両岸部、卯年は弘治元年（1555）にあたる。徳川家康の入府後は、明治までほぼ旗本の知行地となっていた。

Ⅲ　遺跡の概要

東原遺跡は、入間郡毛呂山町葛貫地内に所在する。遺跡の立地としては毛呂台地上となるが、周辺は南側の毛呂山丘陵から続く、標高のやや高い部分にあたっている。台地は東流する葛川やその支流に開析され、いくつかの小台地に分岐している。東原遺跡もその狭長な尾根状台地の一つに乗り、南側は開析谷を挟み、中尾遺跡の展開する小台地と対峙している。

この東西へ延びる小台地の頂部は、幅120ｍほどの平坦面が形成され、南北両側は緩やかな斜面地となっている。東原遺跡はこの平坦面に広がる集落遺跡で、遺構確認面での標高は約82ｍ、南側低地との比高差は約８ｍを測る。

発掘調査は、小台地を南北に横断する地方主要道飯能寄居線のバイパス新設工事に伴うもので、平成12・21年度の２次にわたり実施した。調査対象面積は第１次が1,500㎡、第２次が148㎡の計1,648㎡である。調査区は道路建設予定地であるため、幅約15ｍ、長さ約120ｍと細長いものとなっている。第１次調査区には、生活道路のため調査が及ばなかった部分がある。また、第２次調査区は、第１次調査区の南端に連続している。

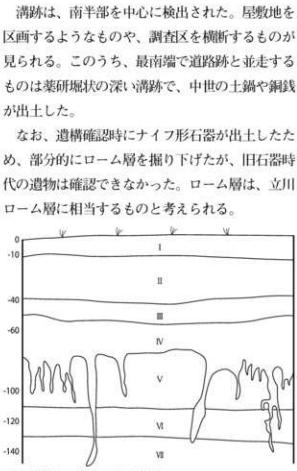
調査前、調査区一帯は畑地となっていた。しかし、明治14年測量の迅速測図を見ると、当所周辺には松林の広がっていたことが分かる。開墾の時期は不明ながら、耕地化に伴う松木の抜根が、かなりの深さにまで及んだことは明らかである。それは、耕作土の下にローム・ブロックを混じた撹拌土が厚く堆積していたことからも首肯される。住居跡は耕作土の下、腐食土と考えられる褐色土層から掘り込まれているが、抜根による撹乱は同層にまで達し、締まりの弱いふかふかの状態となっていた。このため、遺構確認面はソフト・ローム層に設定した。

両次の調査で検出された遺構は、住居跡10軒（縄文時代１軒、奈良時代３軒・平安時代６軒）、溝跡７条、土壙25基、ピット多数である。縄文時代の住居跡は調査区の中央部、奈良・平安時代の住居跡は同じく北半部に７軒、南端部に２軒が分布する。出土遺物から見た住居跡の所属時期は、８世紀第Ⅲ四半期が３軒、９世紀第Ⅱ半期が１軒、同Ⅲ四半期が５軒である。

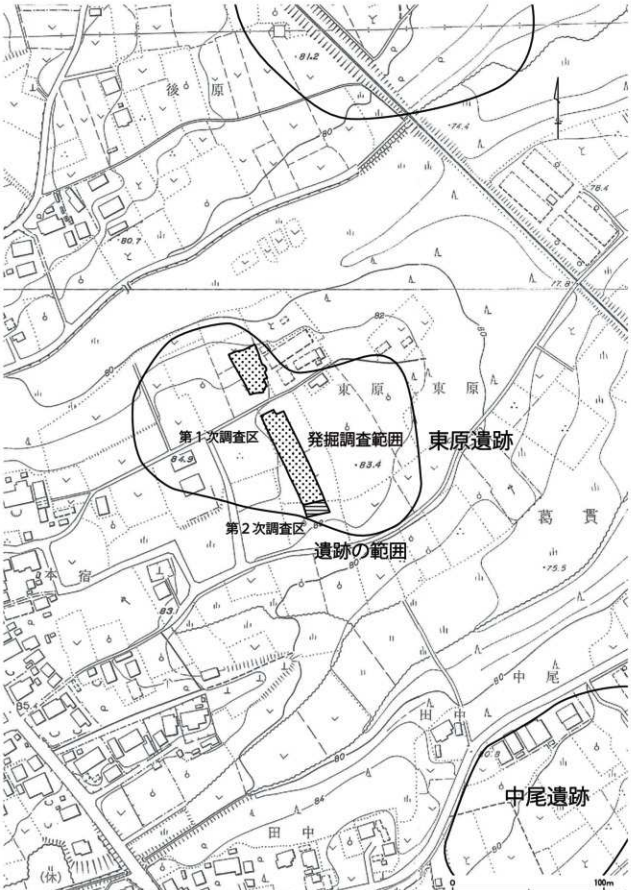
土壙は散漫ながら調査区全体に分布し、特に集中した傾向は認められなかった。うち５基からは奈良・平安時代の遺物が出土したものの、大半は遺物の出土がほとんどなく、所属時期は明らかにできなかった。

溝跡は、南半部を中心に検出された。屋敷地を区画するようなものや、調査区を横断するものが見られる。このうち、最南端で道路跡と並走するものは薬研堀状の深い溝跡で、中世の土鍋や銅銭が出土した。

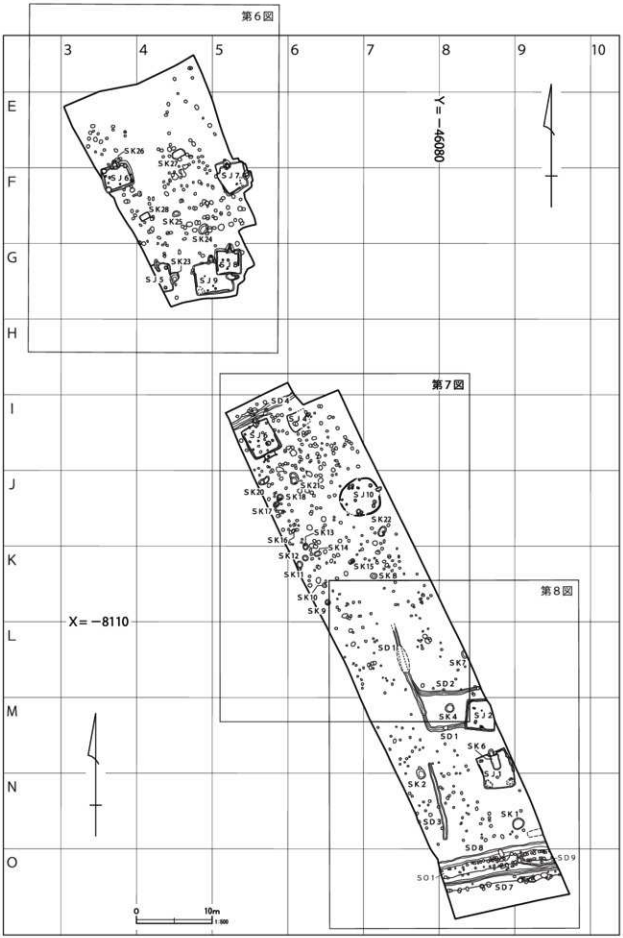
なお、遺構確認時にナイフ形石器が出土したため、部分的にローム層を掘り下げたが、旧石器時代の遺物は確認できなかった。ローム層は、立川ローム層に相当するものと考えられる。



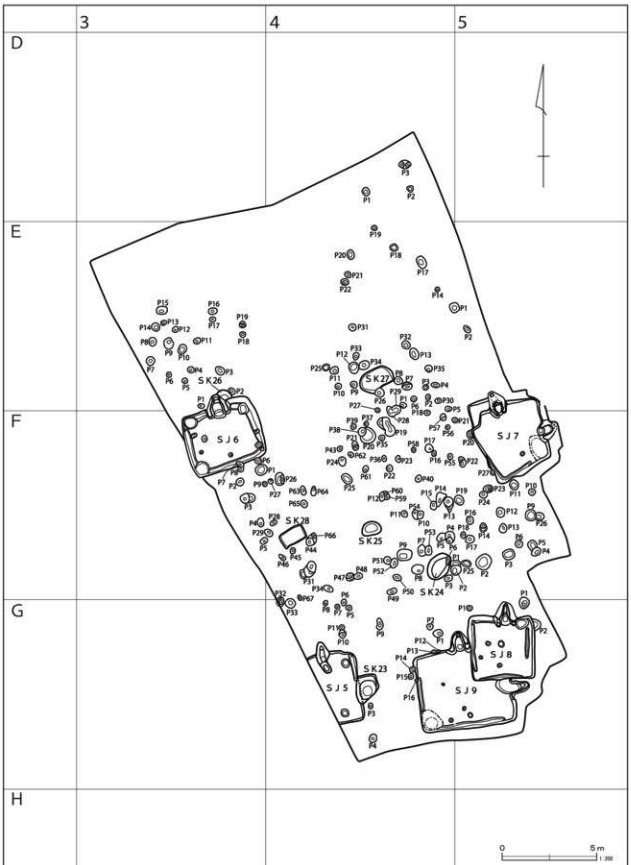
第３図　基本土層図


第１次調査区
発掘調査範囲
東原遺跡
第２次調査区
遺跡の範囲
中尾遺跡
後原
東原
東原
葛貫
本宿
中尾
田中
田中
(休)
100m
1:2500

第４図　調査区位置図


第6図
第7図
第8図
3
4
5
6
7
8
9
10
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
Y=−46080
X=−8110
SK26
SK27
SK28
SK25
SK24
SK23
SJ7
SJ8
SJ9
SD4
SK21
SK20
SK18
SK17
SK16
SK13
SK14
SK12
SK11
SK10
SK9
SK22
SK15
SK8
SJ10
SD1
SK7
SD2
SK4
SJ2
SK6
SJ3
SK2
SD3
SK1
SD8
SD9
SD7
SO1
0
10m
1:500

第 5 図　調査区全体図


3
4
5
D
E
F
G
H
SJ6
SJ7
SJ8
SJ9
SJ5
SK26
SK27
SK78
SK25
SK24
SK23
0
5m
1:200

第６図　調査区全測図（１）

5
6
7
8
I
J
K
L
M
SD4
SJ4
SJ6
SJ10
SK20
SK21
SK18
SK17
SK22
SK13
SK16
SK12
SK14
SK11
SK15
SK8
SK10
SK9
SD1
0
5m
1:200

第７図　調査区全測図（２）

6
7
8
9
L
M
N
O
SD1
SD2
SD3
SD7
SD8
SD9
SO1
SK1
SK2
SK4
SK6
SK7
SJ1
SJ2
0
5m
1:200

第８図　調査区全測図（３）

Ⅳ　遺構と遺物

1. 住居跡

検出された住居跡は10軒で、縄文時代が１軒、奈良時代が３軒、平安時代が６軒である。奈良・平安時代の住居跡のうち７軒は調査区北半部、他の２軒は南端部に分布している。検出状況から見て、住居跡群が調査区の東西に延びていることは明らかである。調査区が南北に細長いため明言はできないが、集落の中心は、平坦部のうちでも最も標高の高い部分にあると考えられる。

なお、調査区内には全域にわたって小ピットが多数検出されている。縄文時代の住居跡ピットの可能性もあるが、確実な住居跡と認定できたものはない。

第１号住居跡（第９図）

調査区の最南端、M・N－８グリッドに位置し、床面を第６号土壙に切られる。

東西の壁が中央部で逆「く」字状に屈折するため、全体は不整な長方形となっている。方向を違える２軒の重複、乃至は拡張かとも思われたが、精査によってもその形跡は認められなかった。東西長は約4.1ｍとほぼ均一ながら、南北長は西壁部で約4.2ｍ、東壁部で約5.1ｍと大きな差が生じている。また、北側両隅の屈曲は鋭いが、南壁がやや膨らむので、南側両隅のそれは丸味を帯びている。壁溝内側の床面積は約18㎡である。カマドの設けられた北壁と直行する軸を主軸とした場合、その方向はおよそN－19°－Wを指す。南壁と直行する軸に取った場合はおよそN－２°－Wなので、住居跡の北側と南側の方向は17°のずれとなる。

確認面から床までの深さは15㎝前後で、床面は中央部へ向かって僅かに傾斜する。

カマドは北壁中央部に設けられる。焚き口部を土壙に切られるが、おおよそ燃焼部は幅70㎝、奥行き90㎝の楕円形で、火床部は床面より20㎝ほど低くなっている。袖は壁面にローム・ブロックや小礫混じりの粘土を張り付けて構築しており、土器や大型礫などの芯材は用いられていない。

北西隅部、及び南東隅部にピットが検出された。床面からの深さはＰ１が15㎝、Ｐ２が25㎝で、ともに柱痕は観察できなかった。位置的にもかなり壁に寄っているため、柱穴としては疑問が残る。

壁溝は北壁東側から東壁の中ほど、西壁の一部で確認された。幅は不均一で、深さも数㎝に過ぎない。

遺物は、覆土より土師器の坏・甕、須恵器の坏、砥石などが少量出土している。図示したものを含め、土器はいずれも微細な破片である。遺物の特徴から見て、本住居跡の所属時期は８世紀の第Ⅲ四半期と考えられる。

第２号住居跡（第10図）

M－８グリッドに位置し、南西隅部を第１号溝跡に切られる。

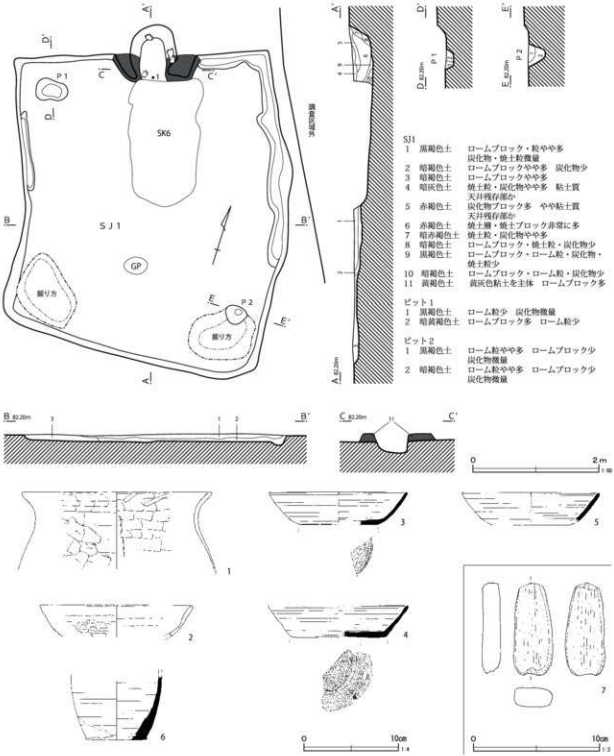
北東隅部は調査区外となるものの、平面は東西約3.9ｍ、南北約4.1ｍの方形で、壁溝内側の床面積は約13㎡が測れる。カマドは検出できなかったが、覆土の状態から推して、調査区外となる東壁の中央部に設けられていると考えられる。その場合、住居跡の主軸方向（東西軸）はおよそＥ－５°－Sとなる。

確認面から床までの深さは北半部で約20㎝、南半部は一段低くなり30㎝ほどとなる。床面と壁溝中には、７個のピットが確認された。Ｐ１とＰ２は位置的に主柱穴とも思われるが、床面からの深さは５㎝・10㎝とともに浅く、柱痕も

観察されなかった。また、中央部には床面の焼土化した部分 2 箇所が検出された。

壁溝は検出範囲内で全周し、幅20～30㎝、深さ 5 ㎝前後である。

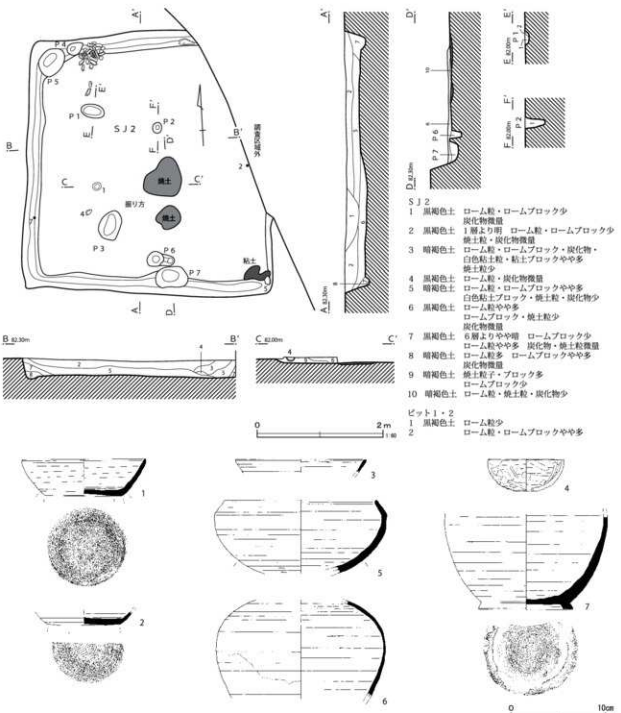
遺物は、覆土中より土師器の甕・坏、須恵器の甕が少量出土している。このほか、北西隅部の床面上からは、編物石と思われる細長い自然礫がまとまって出土した。遺物の特徴から見て、本住居跡の所属時期は 8 世紀の第Ⅲ四半期と考えられる。



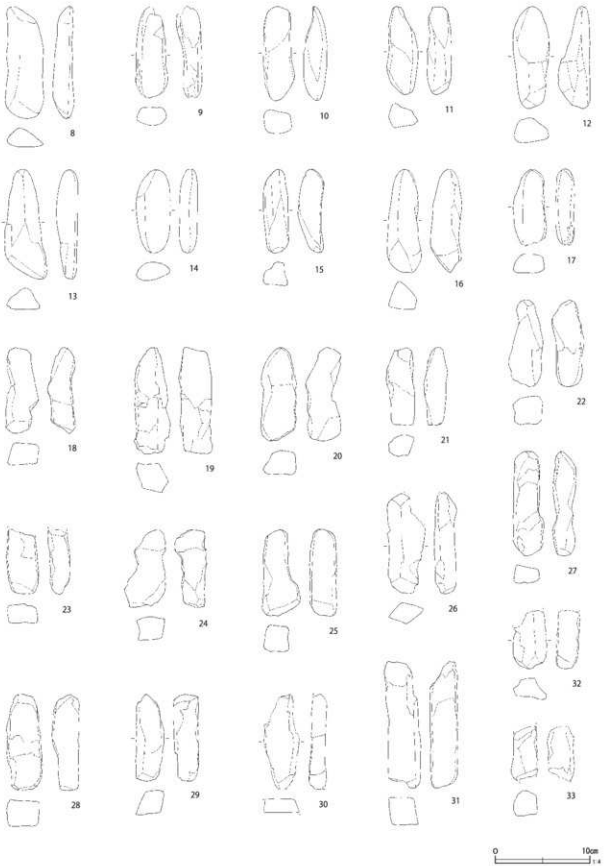
第 9 図　第 1 号住居跡・出土遺物

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表（第９図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	土師器	甕	(19.8)	(8.2)	－	ＢＣＤ	－	Ⅱ	明赤褐	№２・カマド	5-1
2	土師器	坏	(16.0)	(3.4)	－	ＢＣＤＥ	－	Ⅱ	黄橙		5-2
3	須恵器	坏	(14.5)	3.5	(8.3)	ＣＤＨ	20	Ⅰ	灰	南比金　底部回転ヘラ削り	5-2
4	須恵器	坏	(14.7)	(3.4)	(10.2)	ＡＣＤＦ	30	Ⅰ	灰	東金子　№１	5-3
5	須恵器	坏	(14.4)	(3.2)	－	ＣＤＦＨ	－	Ⅰ	灰	南比金　SJ-1 一括・SK-6 №１	5-2
6	須恵器	小型壺	－	(6.9)	6.3	ＡＣＤ	－	Ⅰ	灰	東金子　外面自然釉	
7	石製品	石錘	長さ [7.3] cm　幅 3.2 cm　厚さ 1.5 cm　重さ 53.70g							砂岩	10-1



第10図　第２号住居跡・出土遺物（１）



第11図　第２号住居跡出土遺物（２）

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表（第10・11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	須恵器	坏	12.9	3.9	8.3	ＣＤＦ	100	Ⅱ	灰白	東金子？　底部回転ヘラ削り　№４	6-1
2	須恵器	坏	－	(1.7)	(7.5)	ＣＤＦＨ	底 40	Ⅰ	灰	南比金　底部回転糸切り後周辺部回転ヘラ削り　№８	5-4
3	須恵器	坏	(13.6)	(1.4)	－	ＣＤＦＨ	－	Ⅱ	灰	南比金	5-4
4	土師器	椀	(7.8)	(3.4)	(2.5)	ＢＣＤ	40	Ⅰ	橙	口縁一部に油煙付着　№３	6-2
5	須恵器	鉢鉢	(16.0)	(7.8)	－	ＣＤＨ	20	Ⅰ	灰白	南比金　№６	5-5
6	須恵器	長頸壺？	－	10.4	－	ＣＤ	－	Ⅱ	灰	東金子　№11	5-6
7	須恵器	長頸瓶	－	(10.1)	9.8	ＣＤＧ	底 80	Ⅰ	灰白	秋間？　部分的に自然釉　№２	5-7
8	石製品	編物石	長さ 11.8 cm	幅 4.1 cm	厚さ 2.1 cm	重さ 139.75g				砂岩	10-2
9	石製品	編物石	長さ [9.6] cm	幅 3.4 cm	厚さ 1.9 cm	重さ 89.78g				砂岩　被熱している	10-2
10	石製品	編物石	長さ 9.9 cm	幅 3.3 cm	厚さ 2.5 cm	重さ 104.17g				砂岩	10-2
11	石製品	編物石	長さ 9.3 cm	幅 3.3 cm	厚さ 2.5 cm	重さ 112.80g				砂岩	10-2
12	石製品	編物石	長さ 10.7 cm	幅 3.8 cm	厚さ 2.6 cm	重さ 148.98g				砂岩	10-2
13	石製品	編物石	長さ 11.5 cm	幅 4.5 cm	厚さ 2.2 cm	重さ 127.90g				砂岩	10-2
14	石製品	編物石	長さ 8.8 cm	幅 3.6 cm	厚さ 1.9 cm	重さ 81.69g				砂岩	10-2
15	石製品	編物石	長さ 8.8 cm	幅 2.6 cm	厚さ 2.5 cm	重さ 80.02g				砂岩	10-2
16	石製品	編物石	長さ 10.9 cm	幅 3.7 cm	厚さ 2.9 cm	重さ 133.49g				砂岩	10-2
17	石製品	編物石	長さ [8.0] cm	幅 3.5 cm	厚さ 2.0 cm	重さ 83.86g				砂岩	10-2
18	石製品	編物石	長さ 9.0 cm	幅 3.0 cm	厚さ 2.4 cm	重さ 97.55g				チャート	10-2
19	石製品	編物石	長さ 11.2 cm	幅 3.8 cm	厚さ 3.1 cm	重さ 167.76g				チャート	10-2
20	石製品	編物石	長さ 9.8 cm	幅 3.7 cm	厚さ 2.6 cm	重さ 152.41g				チャート	10-3
21	石製品	編物石	長さ 8.1 cm	幅 3.1 cm	厚さ 2.3 cm	重さ 76.31g				チャート	10-3
22	石製品	編物石	長さ 9.2 cm	幅 3.7 cm	厚さ 3.0 cm	重さ 116.35g				チャート	10-3
23	石製品	編物石	長さ [6.2] cm	幅 3.6 cm	厚さ 2.3 cm	重さ 52.97g				チャート	10-3
24	石製品	編物石	長さ [6.8] cm	幅 3.5 cm	厚さ 2.1 cm	重さ 74.71g				チャート	10-3
25	石製品	編物石	長さ 8.2 cm	幅 4.3 cm	厚さ 2.5 cm	重さ 114.94g				チャート	10-3
26	石製品	編物石	長さ 9.2 cm	幅 4.0 cm	厚さ 2.8 cm	重さ 149.49g				チャート	10-3
27	石製品	編物石	長さ [10.5] cm	幅 4.0 cm	厚さ 2.2 cm	重さ 110.77g				チャート	10-3
28	石製品	編物石	長さ 11.0 cm	幅 3.3 cm	厚さ 1.9 cm	重さ 114.24g				チャート	10-3
29	石製品	編物石	長さ 10.1 cm	幅 3.9 cm	厚さ 2.8 cm	重さ 162.69g				チャート	10-3
30	石製品	編物石	長さ 9.1 cm	幅 4.0 cm	厚さ 2.6 cm	重さ 96.47g				チャート	10-3
31	石製品	編物石	長さ 13.3 cm	幅 3.8 cm	厚さ 2.9 cm	重さ 226.96g				チャート	10-3
32	石製品	編物石	長さ [10.0] cm	幅 [3.8] cm	厚さ [1.9] cm	重さ 82.12g				チャート　外形割れている	
33	石製品	編物石	長さ [5.8] cm	幅 2.9 cm	厚さ 2.7 cm	重さ 65.11g				安山岩	

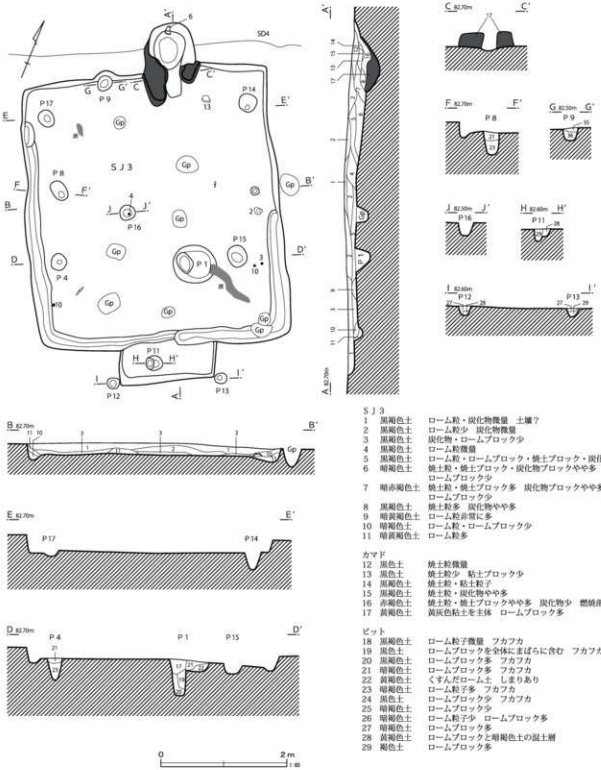
第３号住居跡（第12図）

Ｉ－５グリッドに位置し、カマドの北端部を第４号溝跡に切られる。

全体は南北約4.3ｍ、東西約４ｍの長方形を呈し、南壁には入口施設と思われる張り出し部がある。４壁は直線的で、それぞれの隅部もほぼ直角をなしている。壁溝内側の床面積は約14.4㎡で、主軸（南北軸）の方向は、およそＮ－27°－Ｗを指す。

確認面から床までの深さは15㎝前後で、床面は中央部がやや高まるほか、カマドの周囲は燃焼部に向かって傾斜している。床面には８個のピットが検出された。大半は壁に寄って穿たれており、西壁際の３個と東壁際の２個には規則的な配置性が窺える。但し、いずれも明確な柱痕は観察されなかった。南壁の張り出しは幅（東西）約1.5ｍ、長さ（南北）約0.55ｍの長方形で、床面からは約６㎝高くなっている。その東西の隅部には、外側に同様の小ピットがある。これも柱痕は明らかでないが、張り出し部に伴うもので、入口に関わる施設と考えられる。

カマドは北壁の中央、やや東寄りに設けられる。袖及び燃焼部は地山（ローム）を荒掘りした後、粘土を貼って構築している。残存した袖には、土器や大型礫などの芯材は用いられていない。燃焼部は幅約0.8ｍ、奥行き約1.2ｍの楕円形で、火



ＳＪ３

1	黒褐色土	ローム粒・炭化物微量　土壌？
2	黒褐色土	ローム粒少　炭化物微量
3	黒褐色土	炭化物・ロームブロック少
4	黒褐色土	ローム粒微量
5	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少
6	暗褐色土	焼土粒・焼土ブロック・炭化物ブロックやや多 ロームブロック少
7	暗赤褐色土	焼土粒・焼土ブロック多　炭化物ブロックやや多 ロームブロック少
8	黒褐色土	焼土粒多　炭化物やや多
9	暗黄褐色土	ローム粒非常に多
10	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック少
11	暗黄褐色土	ローム粒多

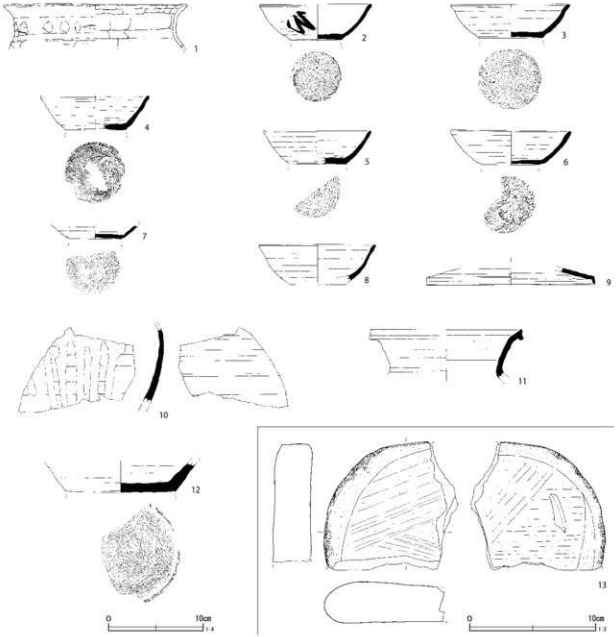
カマド

12	黒色土	焼土粒微量
13	黒色土	焼土粒少　粘土ブロック少
14	黒褐色土	焼土粒・粘土粒子
15	黒褐色土	焼土粒・炭化物やや多
16	赤褐色土	焼土粒・焼土ブロックやや多　炭化物少　燃焼部
17	黄褐色土	黄灰色粘土を主体　ロームブロック多

ピット

18	黒褐色土	ローム粒子微量　フカフカ
19	黒色土	ロームブロックを全体にまばらに含む　フカフカ
20	黒褐色土	ロームブロック多　フカフカ
21	暗褐色土	ロームブロック多　フカフカ
22	黄褐色土	くずれたローム土　しまりあり
23	暗褐色土	ローム粒子多　フカフカ
24	黒色土	ロームブロック少　フカフカ
25	暗褐色土	ロームブロック少
26	暗褐色土	ローム粒子少　ロームブロック多
27	暗褐色土	ロームブロック多
28	黄褐色土	ロームブロックと暗褐色土の混土層
29	褐色土	ロームブロック多

第12図　第３号住居跡



第13図　第３号住居跡出土遺物

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	土師器	甕	(19.2)	(4.7)	－	ＢＣＤ	口縁30	Ⅰ	にぶい橙	№11	7-1
2	須恵器	坏	11.7	3.8	5.3	ＣＤＨ	80	Ⅱ	灰白	南比金　底部回転糸切り　墨書「万」「戸弓」？　№4	6-3
3	須恵器	坏	12.4	3.6	6.7	ＣＤＨ	100	Ⅱ	灰白	南比金　全面煤ける　№3	6-4
4	須恵器	坏	11.4	3.6	6.4	ＣＤ	80	Ⅱ	灰	南比金　煤ける　底部回転糸切り　№14	6-5
5	須恵器	坏	(11.2)	3.5	(6.1)	ＣＤＨ	－	Ⅱ	灰白	南比金　底部回転糸切り　№13	7-2
6	須恵器	坏	(12.6)	3.6	6.0	ＣＤＦＨ	40	Ⅲ	浅黄橙	南比金　土師質　底部回転糸切り　№6	6-6
7	須恵器	坏	－	(1.6)	5.5	ＣＤＨ	底70	Ⅱ	灰白	南比金　底部回転糸切り　№9・カマド	7-2
8	須恵器	坏	(12.2)	(4.0)	－	ＣＤＨ	－	Ⅱ	灰	南比金　全面煤ける　№15	7-2
9	須恵器	蓋	(7.7)	(1.9)	－	ＣＤＨ	－	Ⅱ	灰	南比金　カマド	7-3
10	須恵器	壺	－	(9.2)	－	ＣＤＧＨ	－	Ⅰ	灰	南比金　自然釉　№12・17	7-4
11	須恵器	甕	(15.9)	(5.5)	－	ＡＣＤ	－	Ⅱ	暗灰	産地不明	7-3
12	須恵器	甕	－	(3.4)	11.8	ＣＤＦ	底50	Ⅰ	灰	南比金　底部回転ヘラ削り後ナデ　外面自然釉	7-4
13	石製品	石皿	長さ[10.1]cm　幅[10.7]cm　厚さ3.2cm　重さ480g							砂岩　砥石への再利用？　№5	5-8

床面は焚口より一段低くなっている。奥壁も段を有し、緩やかに立ち上がる。

壁溝は東壁中央～南壁～西壁に巡る。幅は25㎝前後、床からの深さは５㎝前後である。

遺物は覆土中を中心に、土師器の甕、須恵器の甕・坏・蓋、石皿（？）などが出土している。土器の特徴から見て、本住居跡の所属時期は９世紀の第Ⅲ四半期と考えられる。

また、床面上に若干の炭化材が認められたが、火災によるものではないようである。

第４号住居跡（第14図）

Ｉ－６グリッドを中心に位置する。東半部は削平により床面まで失っているので、住居跡全体の形状や規模は明らかでない。

検出した範囲は南北約2.5ｍ、東西約１ｍであるが、東側に焼土や炭化物を含んだ掘り込みが存在する。位置的には東西の中心線上となるので、カマドの残存と推測される。この場合、東西規模は約2.7ｍが測れ、西壁が外へ膨らむものの、平面は長方形となる。西カマドとすれば主軸（東西軸）の方向は、およそＥ－28°－Ｎを指す。

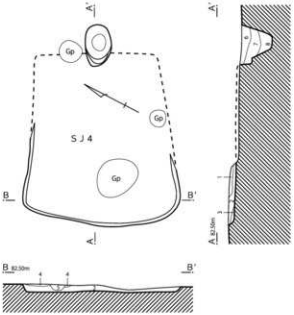
確認面から床までは７㎝ほどで、やや南側が高まるが、床面はほぼ平坦である。

残存したカマドは径0.65×0.4ｍほどの楕円形で、覆土最上層の下が火床面と思われる。下位は掘り方と考えられるが、かなりの深さがあることに疑問が残る。その他、柱穴や壁溝などの付属施設は検出されなかった。

遺物は、覆土中より土師器の甕、須恵器の坏が30片ほど出土している。しかし、いずれも微細な破片であるため、図示することができなかった。須恵器の坏は底部回転糸切り離し（南比企窯跡産）が見られるので、本住居跡の所属時期はおおよそ９世紀代後半と考えられる。

第５号住居跡（第15図）

Ｇ－４グリッドに位置する。埋没後に東壁の一部を第23号土壙に切られるほか、西側は調査区外となるので、住居跡全体の規模は明らかでない。



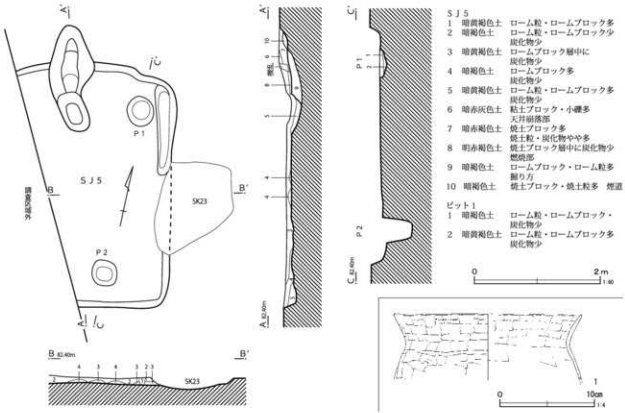
ＳＪ４
1　黒褐色土　ロームブロック少　フカフカ
2　暗褐色土　ロームブロックやや多　フカフカ
3　暗褐色土　ロームブロック多　フカフカ　粘性やや有
4　黒色土　ローム粒子少　フカフカ
5　黒色土　ローム粒子少　焼土粒子少　フカフカ
6　暗褐色土　焼土粒全体に含む　炭化物粒を点々と含む　ローム粒多　やや硬質
7　暗褐色土　焼土粒まばら　炭化物粒を点々と含む　ローム粒少　やや硬質
8　暗褐色土　焼土粒まばら　ロームブロックを全体に含む　フカフカ軟らかい

第14図　第４号住居跡

検出した範囲は南北約3.8ｍ、東西は約2.5ｍである。東・南の壁が直線的であるのに対し、北壁は外へ張り出して丸味を有する。カマドが壁の中央部に設けられていると仮定すれば、東西は3.2ｍほどが測れ、平面は南北に長い長方形となる。主軸(南北軸)の方向は、およそＮ－16°－Ｗを指す。

確認面から床までの深さは15㎝前後で、南に向け僅かに傾斜している。床面は平坦ながら、南側はやや凹凸を有している。床面からは２個のピットが検出された。平面規模はともに径0.4ｍほどで、深さはＰ１が約10㎝、Ｐ２が約50㎝と大きく異なっている。また、２個とも明確な柱痕は観察されなかった。

カマドは北壁に設けられる。位置は明確とし得ないが、やや張り出した北壁の様子から見て、ほ



第15図　第５号住居跡・出土遺物

第５表　第５号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	土師器	甕	(19.7)	(7.0)	－	ＢＣＤ	口縁 30	Ⅱ	橙		7-5

ぼ中央部と思われる。焚き口部は0.65×0.4ｍの楕円形で、床面より10㎝ほど窪んでいる。燃焼部は幅0.7ｍ、長さ0.65ｍの範囲で、火床面は奥壁に向かい緩やかに立ち上がっている。焚口から奥壁まで底面はロームが貼られていたが、袖は検出できなかった。

壁溝は東壁の一部で検出されたにすぎない。幅は20～30㎝、床からの深さは３㎝前後である。

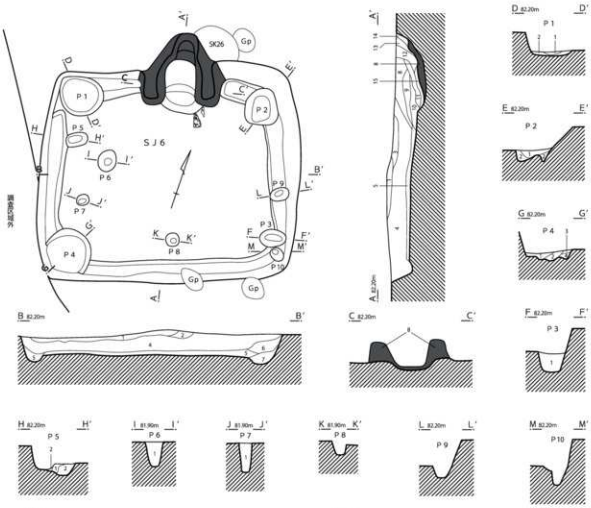
遺物は、覆土より土師器の甕が数片出土した。図示し得たものを含め、いずれも微細な破片である。時期的には９世紀後半と考えられる。

第６号住居跡（第16図）

Ｆ－３グリッドを中心に位置する。最北端に検出された住居跡で、カマドと北壁で第26号土壙を切る。

平面は東西に長い長方形で、東西約4.1ｍ、南北約3.4ｍを測る。壁溝内側の床面積は約8.6㎡となる。４壁はやや外側へ張り出し、各隅部の屈曲も緩やかである。このため、全体は丸味を帯びた印象となっている。覆土もこの部分では傾斜した堆積となっているので、ほぼ南西の隅部に相当すると思われる。主軸（南北軸）の方向は、およそＮ－19°－Ｗを指す。

確認面から床までの深さは25㎝前後で、床面はほぼ平坦ながら、カマド前面の焚き口部は10㎝程度低くなっている。床面及び各隅部からは10個のピットが検出された。南東を除く３隅のものは深さこそ10㎝程度に過ぎないが、径は0.55～0.75ｍと大きい。明確な柱痕は観察されなかったものの、南東のものを含め、主柱穴と考えてよいと思われる。



SJ6
1　赤褐色土　焼土ブロック層
2　暗赤褐色土　焼土粒子やや多　炭化物少
3　黒褐色土　ローム粒少　炭化物微量
4　黒褐色土　ローム粒子・炭化物少
5　暗褐色土　ローム粒やや多　ロームブロック・焼土粒・炭化物少
6　暗褐色土　ローム粒やや多　炭化物少
7　暗黄褐色土　ローム粒多　ロームブロック少
8　灰赤褐色土　ローム粒多　粘土ブロック・小礫やや多　天井残存部
9　暗灰褐色土　ローム粒やや多　粘土ブロック・小礫少　天井崩落部
10　暗赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック多　燃焼部
11　赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック多　炭化物やや多　燃焼部
12　暗褐色土　焼土粒・焼土ブロック少
13　暗褐色土　焼土粒・焼土ブロックやや多　炭化物少　煙出し
14　暗褐色土　焼土粒・焼土ブロック少　炭化物少　煙出し
15　明赤褐色土　焼土ブロック層中に炭化物多　燃焼部

ピット1
1　黒褐色土　ローム粒・ロームブロック少
2　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックやや多

ピット2
1　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック少
3　暗黄褐色土　ローム粒多

ピット3
1　暗黄褐色土　ロームブロック多

ピット4
1　黒褐色土　ローム粒・炭化物少
2　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少
3　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックやや少
4　ほりすぎ

ピット5
1　黒褐色土　ローム粒・炭化物少
2　暗褐色土　ローム粒やや多　ロームブロックやや多

ピット6
1　暗褐色土　ローム粒やや多　ロームブロック少

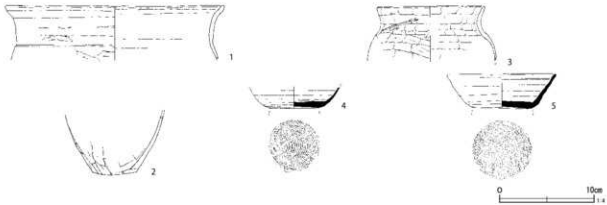
ピット7
1　黒褐色土　ローム粒・ロームブロック少

0　2m
1:60

第16図　第６号住居跡

第６表　第６号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	土師器	甕	(22.8)	(5.8)	－	B C D	－	Ⅱ	にぶい橙		7-6
2	土師器	甕	－	(6.4)	(4.7)	B C D F	底 30	Ⅱ	橙		
3	土師器	台付甕	11.3	(5.8)	－	C D	口～底 70	Ⅱ	にぶい橙		7-7
4	須恵器	坏	－	(2.3)	5.2	C D H	底 100	Ⅰ	灰	南比金　底部回転糸切り	
5	須恵器	坏	11.4	3.6	6.4	A C D	65	Ⅰ	灰	東金子　底部回転糸切り	6-7



第17図　第６号住居跡出土遺物

カマドは北壁中央部に設けられる。袖及び燃焼部は地山（ローム）を荒掘りした後、粘土を貼って構築している。袖は長さ約60㎝、幅約40㎝を測り、北壁に直行して造り付けられる。袖には、土器や大型礫などの芯材は用いられていない。燃焼部は0.95×0.7ｍの楕円形で、火床面は床より10㎝ほど低くなっている。奥壁に向かって緩やかに立ち上がり、先端は煙道状に細まっている。

覆土中からは土師器の甕・台付甕などが少量、また須恵器の坏・甕が10数片出土している。いずれも小破片で、残存率は高くない。

出土遺物から見て、本住居跡の所属時期は９世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第７号住居跡（第18図）

F－５グリッドを中心に位置する。全体は北と東、異なる位置にカマドを備える２軒の住居跡が重複するような形状だが、土層観察では新旧、また建て替えの様子は認められなかった。

北壁がやや長いほか、同壁のカマド部分が外側へ張り出すため、平面は不整な台形状となっている。東西約3.7ｍ、南北約3.5ｍ、床面積約11㎡をそれぞれ測る。また、北壁の西半部は北へ張り出し、棚状の施設が設けられている。カマドは２基設けられているので、主軸方向を南北に取ればおよそN－31°－W、東西に取ればおよそE－17°－Nとなる。

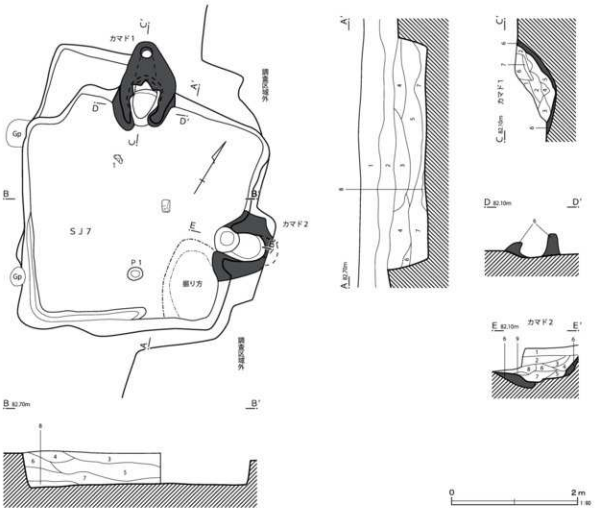
確認面から床までの深さは50㎝前後で、床面は僅かながら中央部が高まっている。ピットは、南壁寄りの床面に１個が検出されたのみである。

カマドは北壁・東壁のそれぞれ中央部に２基構築されている。ともに地山（ローム）を荒掘りした後、粘土を貼って造られている。ローム・ブロックや小礫を含むものの、袖や天井には土器や河原石など、特に芯材は用いられていない。どちらのカマドにも故意に破壊・撤去した様子は窺えないことから、２基は同時に機能していたものと考えられる。

北壁のもの（カマド１）は遺存状態がよく、袖・天井部・煙出しの孔が使用時の状態を保っていた。袖は壁から内傾して延び、焚き口部の幅は30㎝ほどに狭まっている。燃焼部は幅約50㎝、長さ約70㎝の楕円形で、火床面は床より10㎝ほど低くなっている。天井部内面は火熱により焼土化しており、火床面からの高さは約30㎝を測る。天井内面は住居外へ向け斜めに構築され、煙道を形成している。煙道の先端は垂直に立ち上がり、径18㎝の煙出し孔となっている。

東壁のもの（カマド２）はカマド１に比して袖が短く、天井部の遺存も認められなかった。燃焼部は幅約45㎝、長さ約85㎝の楕円形で、焚き口部側は一段低くなっている。この部分の火床面は、床より10㎝ほど低くなっている。奥壁の立ち上がりは急で、煙道となっていたものと推測される。

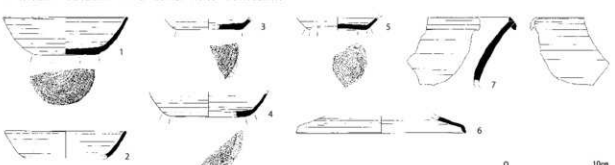
壁溝は南西隅部で確認された。幅約20㎝、床



SJ7
1 耕作土
2 黒褐色土　焼土粒やや多　ロームを斑文状多　炭化物少
3 暗褐色土　ローム粒・焼土粒やや多　ロームブロック少
4 黒褐色土　ローム粒少　ロームを斑文状にやや多
5 黒褐色土　ローム粒やや多　焼土粒・焼土ブロック・炭化物少
6 暗褐色土　ローム粒やや多　ロームブロック少
7 暗褐色土　ローム粒やや多　ロームブロックやや多

カマド1
1 暗褐色土　焼土粒・炭化物やや少
2 暗灰色土　粘土ブロック多　焼土粒やや多　炭化物少　天井崩落部
3 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少　焼土粒・炭化物少
4 明赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック非常に多　炭化物多　燃焼部
5 暗赤褐色土　ローム粒・焼土粒多　ロームブロック少　燃焼部
6 暗褐色土　黄灰色粘土ブロック多　小礫を全体に含む　粘性高く砂質
天井袖構築土
7 赤褐色土　黄灰色粘土ブロック多　焼土化する部分多　天井部被熱部分

カマド2
1 暗褐色土　ローム粒・炭化物を全体にまばらに含む　フカフカ
2 褐色土　ローム粒・焼土粒子を微量　礫を若干含む　フカフカ
3 暗褐色土　ロームブロック・焼土ブロックを全体にまばらに含む　しまり有
4 赤褐色土　焼土ブロックにより構成　しまり欠く炉壁質　天井の崩落したもの
5 暗褐色土　焼土ブロックをまばらに含む　グズグズ
6 灰白色土　灰白色粘土により構成　7層との層理面は焼土層となっている
被覆および天井構築土　粘性強　しまり有
7 暗褐色土　焼土粒多　天井の壊れたもの　グズグズした感じ
8 褐色土　焼土ブロックまばら　ローム多　しまりやや有　フカフカ
9 黒褐色土　焼土ブロック少　灰多　カマドの灰層　しまり・粘性有



第18図　第７号住居跡・出土遺物

第７表　第７号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	須恵器	坏	(13.0)	4.0	7.1	ＣＤＨ	40	Ⅰ	灰	南比金　底部回転糸切り後周辺部回転ヘラ削り　№１	6-8
2	須恵器	坏	(12.7)	(2.9)	－	ＡＣＤＨ	－	Ⅱ	灰	南比金　外底面ヘラ記号「ニ」？	7-8
3	須恵器	坏	－	(1.1)	(6.9)	ＣＤＦ	底 30	Ⅱ	灰白	南比金　底部回転ヘラ削り	7-8
4	須恵器	坏	－	(2.6)	(7.9)	ＣＤＨ	底 20	Ⅱ	灰白	南比金　底部手持ちヘラ削り	7-8
5	須恵器	坏	－	(1.3)	(5.9)	ＣＤＨ	底 40	Ⅱ	灰白	南比金　底部回転糸切り後周辺部回転ヘラ削り 外底面ヘラ記号	7-8
6	須恵器	蓋	(16.8)	(1.8)	－	ＣＤＧ	－	Ⅱ	灰	南比金	7-8
7	須恵器	甕	－	(7.3)	－	ＣＤ	－	Ⅰ	灰	南比金？　内面自然釉	8-1

面からの深さは３cm前後である。

北壁西側に張り出す棚状の施設は、幅約1.2m、カマド脇での奥行き約0.6mを測る。クランク状に屈曲する住居跡北西隅部の形に合わせるように、鉤型の段となっている。確認面から底面までは５cm前後で、床からは50cm前後高い。底面は平坦で、この部分からの遺物出土はなかった。

遺物は小片ながら、覆土中より土師器の甕、須恵器の甕・坏・蓋がビニール袋１/３ほど出土している。このほか、自然礫が若干認められた。出土土器から見て、本住居跡の所属時期は８世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第８号住居跡（第19図）

G－５グリッドを中心に位置し、南西部は埋没後の第９号住居跡を切る。

全体は東西約3.5m、南北約3.3mの方形で、床面積は約８㎡を測る。主軸（南北軸）の方向は、N－Sを指す。

確認面から床までの深さは30cm前後で、床面はほぼ平坦ながら、やや南部が低くなっている。中央～南西部の床には、４個のピットが確認された。径20～35cmほどの小型ピットで、Ｐ２は約40cmと深いものの、他は10cm未満である。また、北東隅部には径0.5×0.7m、深さ10cmほどの掘り込みが検出された（Ｐ４）。浅く遺物の出土もなかったが、位置的に見て貯蔵穴の可能性がある。

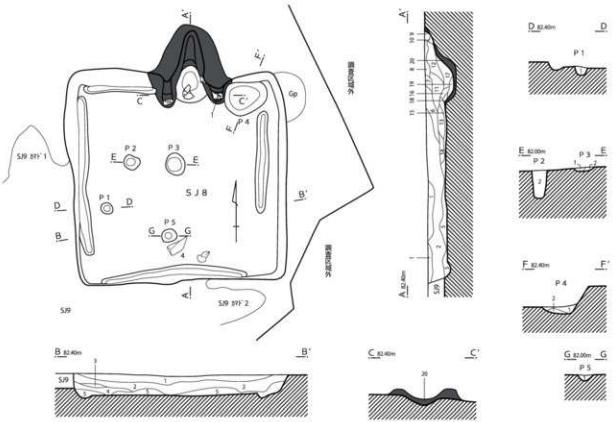
カマドは北壁の中央、僅かに東へ寄った位置に備わる。地山（ローム）を荒掘りした後、粘土を貼って構築されている。なお、袖には土器や大型礫などの芯材は用いられていない。袖はいくぶん開き気味で、焚き口部は広くなっている。燃焼部は幅約45cm、長さ約70cmの楕円型で、火床面は床より15cm前後低くなっている。奥壁は段を有し、煙道状に立ち上がる。

壁溝は４壁に付くが、いずれも部分的で、東壁部ではやや内部に偏っている。幅約20cm、床からの深さは５cm弱である。

遺物は、カマド周辺の覆土中より土師器の甕、台付甕がビニール袋１/２程度出土したほか、須恵器の坏・高台付坏がごく微量ながら出土している。いずれも小片であるため、図示できたものは僅かである。これらの遺物から見て、本住居跡の所属時期的は９世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第８表　第８号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	土師器	甕	(19.7)	(16.0)	－	ＢＣＤ	－	Ⅱ	明赤褐	№３・カマド	8-2
2	土師器	甕	－	(3.9)	(4.0)	ＢＣＤ	底 50	Ⅱ	黄橙		
3	須恵器	坏	(12.3)	4.1	(3.5)	ＡＣＤＧ	30	Ⅰ	灰白	東金子　底部回転糸切り	8-3
4	須恵器	坏	－	(1.5)	(5.0)	ＣＤＨ	底 30	Ⅱ	灰	南比金　底部回転ヘラ削り	8-4
5	須恵器	坏	－	(1.7)	(6.0)	ＣＤＨ	－	Ⅱ	灰	南比金　底部回転糸切り	8-4
6	須恵器	坏	(11.6)	(3.2)	－	ＣＤＧＨ	－	Ⅰ	灰	南比金	8-4
7	須恵器	坏	(11.7)	(2.7)	－	ＣＤＨ	口縁 30	Ⅰ	灰	南比金	8-4



SJ8

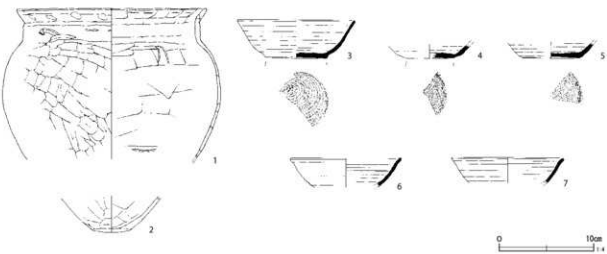
1 黒褐色土　炭化物少
2 暗褐色土　ローム粒・炭化物・焼土粒やや多
3 暗黄褐色土　ロームブロック多　炭化物少
4 暗褐色土　ローム粒・焼土粒多
5 暗黄褐色土　ローム粒多　ロームブロック・焼土粒少
6 暗褐色土　焼土粒・ローム粒やや多
7 暗赤褐色土　焼土粒・ローム粒やや多　ロームブロック少
8 赤灰褐色土　粘土ブロックやや多　天井崩落部
9 暗褐色土　焼土粒・炭化物少　埋出し
10 暗赤褐色土　焼土粒多　焼土ブロックやや多　埋出し
11 暗赤褐色土　焼土粒やや多　焼土ブロックやや多
12 赤褐色土　焼土粒非常に多　焼土ブロック非常に多
13 暗褐色土　炭化物・焼土粒・ローム粒やや多
14 暗褐色土　炭化物・焼土粒少　ローム粒多
15 暗赤褐色土　ローム粒やや多　焼土粒若干
16 暗赤褐色土　ローム粒少　炭化物・焼土粒やや多
17 暗赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック非常に多　燃焼部
18 赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック非常に多　炭化物少
19 明赤褐色土　焼土ブロック塊に炭化物多
20 灰白色土　灰白色粘土により構成　7層との層理面は焼土層となっている
　　袖および天井構築土　粘性強　しまり有

ピット1・2・4・5

1 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少
2 暗褐色土　ローム粒・炭化物微量
3 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックやや少

ピット3

1 暗褐色土　ローム粒少
2 暗黄褐色土　ローム粒多

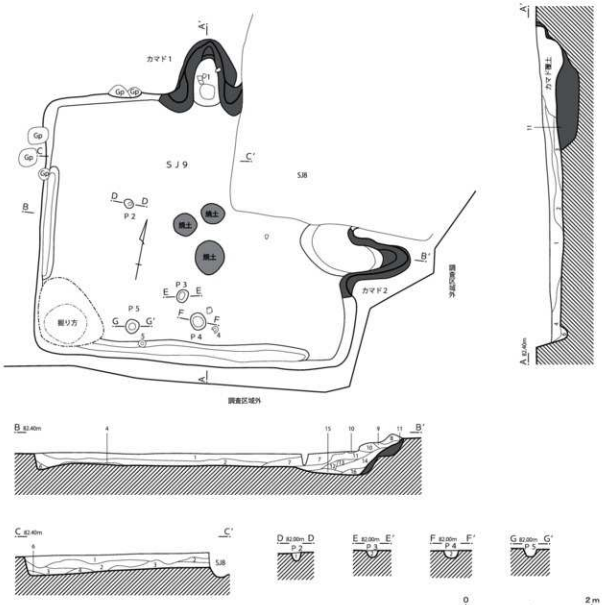


第19図　第８号住居跡・出土遺物

第 9 号住居跡（第20図）

G－4・5 グリッドに位置する。北東部 1／4 ほどを第 8 号住居跡に切られる。覆土は自然堆積で、故意に埋め戻された様子は窺えなかった。

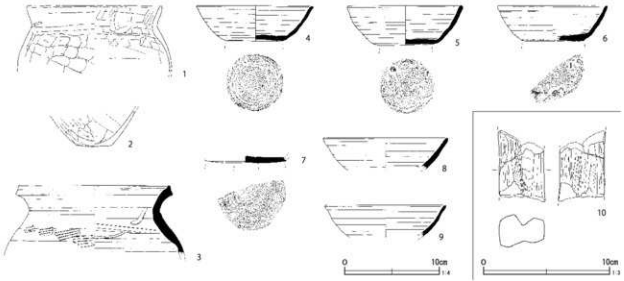
全体は東西に長い長方形で、隅部は丸味を有するが、4 壁は直線的である。東西約5.1m、南北約4.1m、床面積約16㎡をそれぞれ測る。カマドは北(カマド 1)と東(カマド 2)の両壁に備わる。北壁のものを通る軸（南北）を住居跡の主軸とすれば、その方向はおよそ N－8°－W となる。



SJ9
1　黒褐色土　ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック少
2　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック・炭化物やや多
3　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多　焼土ブロック・カーボン多
4　暗黄褐色土　ロームブロック非常に多
5　暗褐色土　ロームブロックやや多　炭化物少
6　暗褐色土　ローム粒・焼土粒少
7　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多　焼土粒やや多
8　暗赤灰色土　粘土ブロック多　焼土粒少　天井構築土
9　暗褐色土　ロームブロック・炭化物・焼土粒少　煙道構築土
10　灰赤色土　粘土ブロック・小礫やや多　ロームブロック多　天井崩落部
11　暗灰赤色土　粘土ブロック・小礫多　ロームブロックやや多　袖および天井構築土
12　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック・焼土粒・焼土ブロック少
13　暗赤褐色土　焼土粒・焼土ブロックやや多
14　赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック多　燃焼部
15　暗褐色土　ロームブロックやや多
16　暗黄褐色土　ロームブロック層

ピット
1　暗褐色土　ローム粒多　ロームブロック少
2　暗褐色土　ローム粒やや多　カーボン少

第20図　第 9 号住居跡



第21図　第９号住居跡出土遺物

第９表　第９号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	土師器	甕	(14.2)	(7.0)	－	ＣＤＥ	口縁 20	Ⅱ	橙	２と同一個体か？　№１	8-5
2	土師器	甕	－	(3.7)	(3.8)	ＢＣＤ	底 80	Ⅱ	にぶい橙	１と同一個体か？　№１	
3	須恵器	短頸壺	(15.8)	(7.3)	－	ＣＤＨ	－	Ⅰ	灰	南比金	8-6
4	須恵器	坏	12.2	3.7	6.0	ＣＤＨＩ	90	Ⅰ	灰	南比金　火襷　外底面ヘラ記号「×」 底部回転糸切り　№３	6-9
5	須恵器	坏	12.0	4.2	5.5	ＣＤＨＩ	100	Ⅱ	灰	南比金　底部回転ヘラ削り　№２	6-10
6	須恵器	坏	(11.6)	3.7	(6.7)	ＣＤＨ	20	Ⅱ	灰	南比金？　底部回転糸切り	8-7
7	須恵器	坏	－	(0.7)	(8.2)	ＣＤＨ	底 50	Ⅰ	灰	南比金　底部回転糸切り後周辺部回転ヘラ削り	8-7
8	須恵器	坏	(13.0)	(3.3)	－	ＣＤＦ	－	Ⅱ	灰	東金子？	8-7
9	須恵器	坏	(12.7)	(3.4)	－	ＣＤＨ	－	Ⅰ	灰	南比金	8-7
10	石製品	砥石	長さ [5.6] cm　幅 3.8 cm		厚さ 2.6 cm		重さ 50.84g			凝灰岩	8-8

確認面から床までの深さは30㎝前後で、床面はほぼ平坦である。ただ、カマドへ向かって緩やかな膨らみを有しており、焚き口部は中央部より10㎝ほど高くなっている。床の中央部には３ヶ所、焼土化した部分が見られた。また、床からは４個のピットが検出された。径15～25㎝、深さ10㎝ほどの小ピットで、うち３個は南壁寄りに偏在している。覆土に柱痕は観察されなかった。

２基のカマドは、地山（ローム）を荒掘りした後、粘土を貼って造られている。ロームや小礫を含むものの、袖や天井には土器や河原石などの芯材は用いられていない。どちらのカマドにも故意に破壊・撤去した様子は窺えないことから、２基は同時に機能していた可能性がある。

カマド１は、北壁中央部に設けられる。燃焼部は幅約40㎝、長さ約80㎝の楕円形で、火床面は床より10㎝ほど深くなっている。先端部は短い煙道と煙出し孔になっているものと考えられる。

カマド２は、東壁中央部に構築される。一部を第８号住居跡に切られるが、ほぼ全体が遺存している。燃焼部は幅約55㎝、長さ約65㎝の楕円形を呈する。但し、焚き口部が大きく窪んでいるため、これと一体化している。奥壁は急角度で立ち上がるものの、カマド１のように垂直ではない。

遺物は覆土及びカマド１より、土師器の甕がビニール１袋ほど、須恵器の坏・甕・蓋などがごく微量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示できたものは少ない。一部混入と思われるものがあるが、出土土器から見て、本住居跡の所属時期は９世紀第Ⅱ四半期と考えられる。

第10号住居跡（第22図）

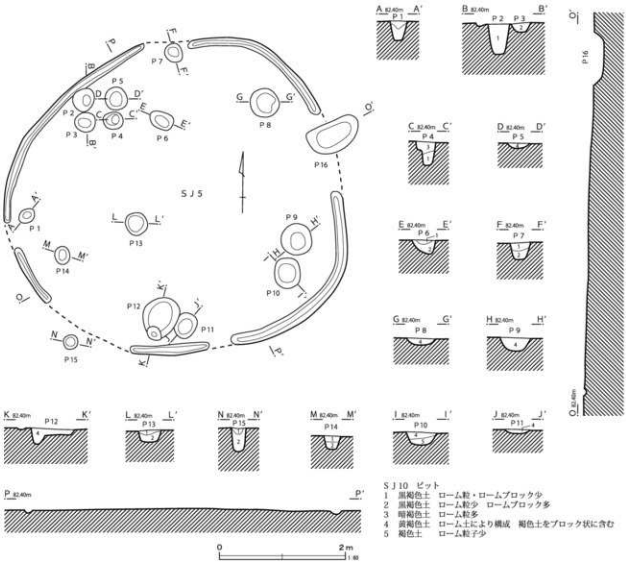
調査区のほぼ中央、J－6・7グリッドに位置する。

全体が削平されているため、検出されたのは壁溝及びピットのみである。壁と床面は完全に失われ、炉跡なども確認できなかった。

壁溝は部分的に切れるが、幅15㎝前後、確認面からの深さ約3㎝で円形に巡る。ただ、南東部は幅約20㎝、深さ約5㎝と他に優っている。壁溝から見た住居跡の規模は長径約5.3m、短径4.9mで、床面積はおよそ20.4㎡が測れる。

ピットは16個検出された。P15・P16以外のピットは、概ね壁溝に沿った分布となっているが、規模や配置に統一感、規則性は視認できない。径は最小25㎝～最大70㎝で、35㎝程のものが多い。深さは4～35㎝とまちまちながら、20㎝前後が主体である。しかし、同様のピットは調査区全域に多数存在しているので、住居跡内に検出されたとはいえ、これらが全て本住居跡に伴うとの確証はない。

遺物の出土はなかった。このため、本住居跡の所属時期は明確とし得ない。住居跡の形状やグリッド出土遺物からは、縄文時代中期の可能性を挙げられる。



第22図　第10号住居跡

2．溝跡

溝跡は調査区中央部に１条、南端部に６条が検出された。走向としては、台地の延びる方向と一致する東西溝が４条、直行する溝が１条、鉤の手状に屈曲するものが２条である。調査区の幅が狭いため各溝跡の規模（範囲）や性格は明らかでないが、鉤の手状のものは屋敷地など、何らかの施設を取り囲む区画溝のようである。また、東西方向の溝も、現道に平行していることから、何らかの区画を意図した施設と思われる。

遺物は第２次調査で検出した第７号溝跡でやや多く出土したが、他は出土が全くなかったり、あっても後世の混入であったりという状況である。覆土や他遺構との重複から見て、これらの溝跡は中世～近世のものと推測される。

第１号溝跡（第23図）

L－７・M－７・M－８グリッドに検出された。L字形に開墾された溝跡で、検出範囲は南北方向が約14ｍ、東西方向が約4.5ｍである。埋没後の第２号溝跡、及び第２号住居跡を切り、さらに調査区外へ延びている。

東西及び屈曲部分は上幅0.5ｍ、確認面からの深さ0.05ｍであるのに対し、南北方向は掘り直しのため、上幅約0.6ｍ、深さ0.08ｍほどとなっている。北端部は土層の攪拌などで消滅しているが、本来はさらに北へ延びていたと思われる。南北溝の走向は、およそN－24°－Wを指す。

微細な破片のため図示できなかったが、土師器の甕、須恵器の坏・甕が１点ずつ出土している。これらは本溝跡の所属時期を示すものではなく、混入であると考えられる。

第２号溝跡（第23図）

L－７・８グリッドを中心に検出された。やや南へ膨らむ東西方向の溝で、検出したのは長さ約８ｍの範囲である。西端部は北へ屈曲して第１号溝跡に切られ、東側は調査区外へ延びる。屈曲した状況や方向性から見て、本溝跡も第１号溝跡と同様、L字形に開墾された区画溝と思われる。あるいは、区画（第２号溝跡）が南へ拡張（第１号溝跡）されたものかもしれない。

上幅は0.6ｍ前後で、確認面からの深さは10㎝前後である。底面は概ね平坦である。壁の立ち上がりは緩やかで、横断面は皿状を呈する。走向はおよそN－25°－Eを指す。

遺物はいずれも小破片のため図示できなかったが、覆土中より須恵器の坏・甕・蓋などが出土している。但し、本溝跡の所属時期を示すものではなく、混入であると考えられる。

第３号溝跡（第24図）

M・N－７・８グリッドに検出された。確認中は10.3ｍであるが、両端は浅くなって収束しているので、開墾による確認面の攪拌を考慮すれば、さらに南北へ延びていた可能性がある。

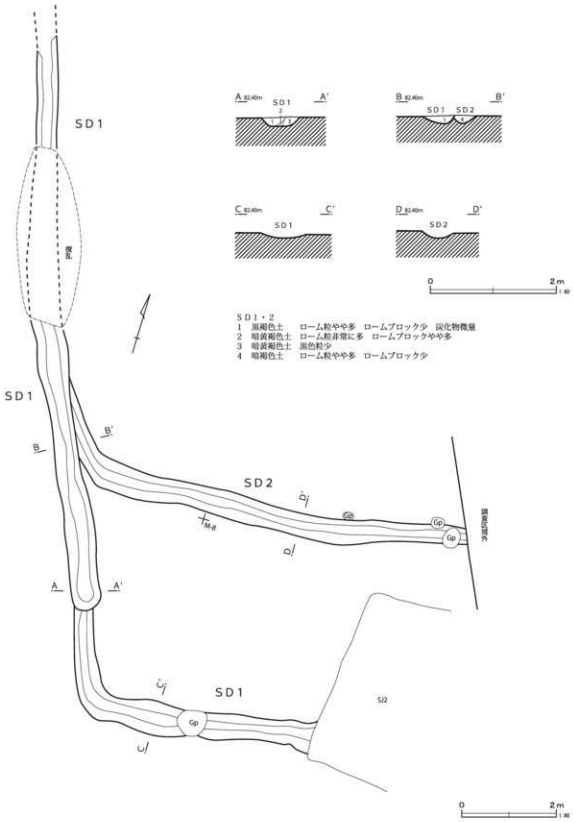
上幅は0.5ｍ前後で、全体はやや東へ湾曲している。確認面から底までの深さは中央部で0.1ｍ前後、両端部で0.05ｍ前後である。壁の立ち上がりは緩やかであり、横断面はU字形を呈する。走向はおよそN－16°－Wを指す。

遺物は図示できなかったものの、覆土より土師器の甕の細片１点が出土している。但し、これも本溝跡の所属時期を示すものではなく、混入であると考えられる。

第４号溝跡（第24図）

I－５グリッドを中心に検出された。調査区を横断する溝跡で、東西はともに調査区外へ延びている。南壁は埋没後の第３号住居跡カマドを切る。

検出したのは長さ約9.5ｍの範囲である。上幅は0.7～1.65ｍと一定せず、西半の南壁は浅い段


SD1
SD1
SD2
SD1
SD1
SD2
SD1
SI2
Gp
A 82.40m
A'
B 82.40m
B'
C 82.40m
C'
D 82.40m
D'
0
2m
1:80
SD1・2
1 黒褐色土 ローム粒やや多 ロームブロック少 炭化物微量
2 暗黄褐色土 ローム粒非常に多 ロームブロックやや多
3 暗黄褐色土 黒色粒少
4 暗褐色土 ローム粒やや多 ロームブロック少

第23図 第1・2号溝跡

を有して広がっている。確認面から底までの深さは0.35m前後で、底面は西から東に向け僅かに傾斜している。両壁は平坦な底から急角度で立ち上がり、横断面は緩い逆台形を呈する。走向はおよそN−63°−Eを指す。

微細な破片であるため図示できなかったが、覆土より土師器の甕、須恵器の甕・坏が少量出土している。これらは本溝跡の所属時期を示すものではなく、混入であると考えられる。

第5号溝跡（欠番）

第6号溝跡（欠番）

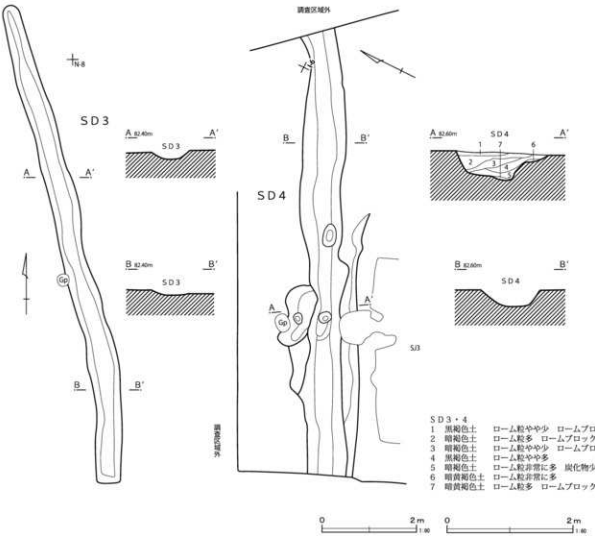
第7号溝跡（第25図）

調査区最南端部、O−8・9グリッドを中心に検出された。調査区を横断する東西方向の溝跡で、両側は調査区外へ延びている。北側に並走する道路跡を切り、埋没後は第9号溝跡に切られる。

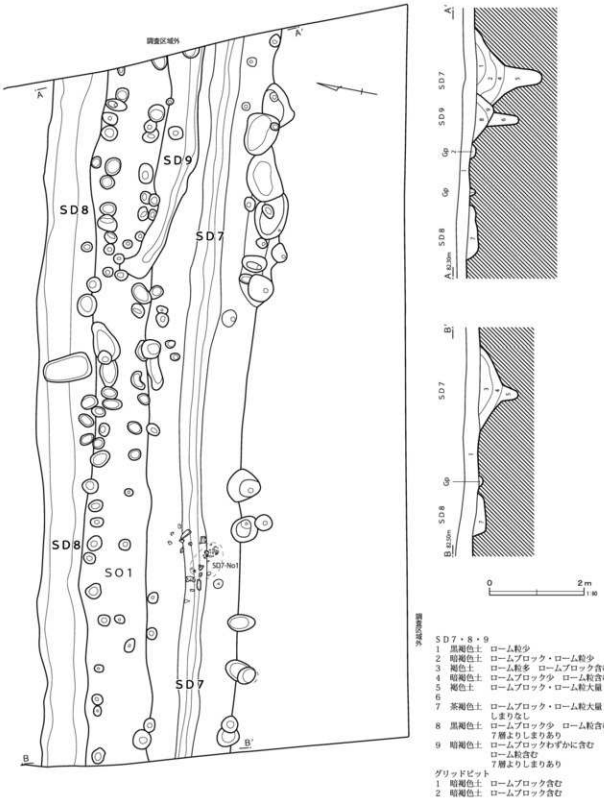
検出したのは長さ約15mで、上幅は約2mである。壁は中位に段を有し、底部へ向かって急角度で落ち込む。このため、横断面はV字状を呈し、所謂「薬研堀」となっている。下幅は約0.2mである。確認面から底までは0.7〜1.3mで、西から東へ傾斜している。走向は、およそN−80°−Eを指す。

覆土は自然堆積で、上層には再掘削された様子が窺えた。

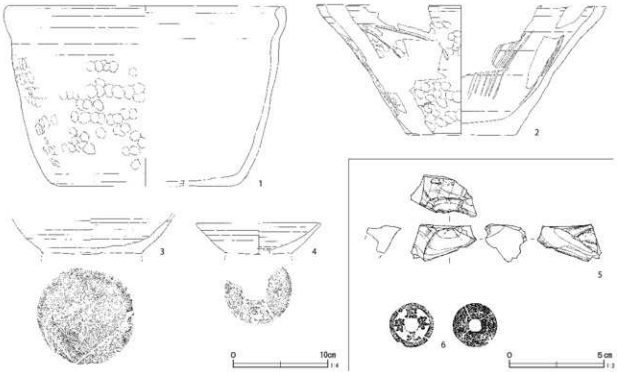
覆土中層より、投棄された状態の土鍋1個体



第24図　第3・4号溝跡



第25図　第７～９号溝跡・第１号道路跡



第26図　第７号溝跡出土遺物

第10表　第７号溝跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	陶器	土鍋	(29.0)	19.0	18.5	ＣＤＩ	50	Ⅱ	ｵﾘｰﾌﾞ黒	在地産　№1	10-4
2	陶器	擂鉢	(30.5)	13.7	(11.4)	ＣＤＩ	30	Ⅱ	にぶい橙	在地産　擂り目はヘラ一本引き　G-9G	10-5
3	土師質土器	鉢？	－	(3.8)	10.6	ＣＤＨ	底100	Ⅱ	橙	軟質　底部回転糸切り　G-9G	
4	土師質土器	坏	(12.9)	(3.3)	(7.0)	ＣＤＨ	50	Ⅱ	橙	軟質　底部回転糸切り　G-9G	10-6
5	石器	石核	長さ[2.1]cm　幅3.5cm　厚さ[2.2]cm　重さ9.80g							黒曜石　撰型石器か？	10-7
6	銭	古銭	口径2.4cm　重さ2.27g							「熙寧元寶」　1068年初鋳	10-8

と、北宋銭の「熙寧元寶」(1068年初鋳) １枚が出土している。これらの遺物から見て、本溝跡は室町時代に埋没したものと推測できる。他に縄文土器・黒曜石の石核（残核）が出土している。

第８号溝跡（第25図）

O－８・９グリッドを中心に検出された。調査区を横断する東西方向の溝跡で、両側は調査区外へ延びている。北側には第７号溝跡及び道路跡が並走する。第９号溝跡・道路跡を切る。

検出したのは長さ約14.6ｍで、上幅は約１ｍである。走向は、およそN－80°－Eを指す。下幅は約0.5ｍを測るが、端部は丸味を有している。これより立ち上がる壁は、北で急、南で緩やかとなっているため、横断面は鶏卵を縦割りにしたような形となっている。底面は高低差がなく、ほぼ一定している。

覆土はローム・ブロックを多く含み、故意の埋め戻しを窺わせる。

遺物の出土はなかったものの、道路跡・第７・９号溝跡との重複・走向関係から推して、近世後半以降のものと考えられる。

第９号溝跡（第25図）

O－９グリッドに検出された。第７号溝跡と第８号溝跡の中間に開鑿される溝で、東側は調査区外へ延びている。道路跡と第７号溝跡を切り、第８号溝跡に切られる。平面図では西側が

浅くなるため収束しているようになっているが、屈曲して北へ方向を転じている。

検出したのは長さ５ｍほどの範囲である。土層観察から得られた上幅は約１ｍ、確認面から底までの深さは約0.4ｍである。東西の走向は、およそN−87°−Eを指す。下幅は狭く、横断面は緩いＶ字状となる。

覆土はローム・ブロックを多く含み、故意の埋め戻しを窺わせる。

遺物の出土はなかったものの、道路跡・第７・９号溝跡との重複・走向関係から推して、近世以降のものと考えられる。

３．道路跡

第１号道路跡（第25図）

O−８・９グリッドを中心に検出された。北辺を第８号溝跡、南辺を第７号溝跡に切られる。第８号溝跡の底面を含む検出面全体には、掘り返したような細かい凹凸が生じており、その範囲は南北両側の溝跡を超えていない。従って、ローム層にまで手が加えられたのは、両溝跡の間に限られていることになる。硬化面は認められなかったものの、このような作業が行われていること、その範囲が東西に細長いことなどから、道路跡であると判断した。この部分は流失や開墾により、表土層直下がハード・ローム層となっている。このため、路面〜硬化面は既に失われていると考えられる。

検出したのは長さ約15ｍ、幅約1.6ｍである。平面図では比較的大きな穴のみを記録してあるが、上述のように、全面にわたって凹凸を有している。南・北に並走する第７・８号溝跡も、この道路の存在を順守して開墾したものと思われる。

遺物の出土はなかったが、本跡を切る第７号溝跡から中世の遺物が出土していることから、鎌倉〜室町時代に造成されたものと考えられる。

４．土壙

調査区全体に25基が検出された（第27・28図）。分布状況は散漫で、特に集中したりするような傾向は見られない。

第１・６・17・18号土壙の４基から土師器や須恵器の坏・甕、緑釉陶器などが出土した。大半は微細な破片のため、図示できたものは僅かである。第６号土壙は平安時代の遺構と考えてよいが、他は遺物の出土がなく、所属時期がはっきりしない。

第１号土壙（第27図）

N−９グリッドに位置する。平面が楕円形の浅い土壙で、長径1.56ｍ、短径1.45ｍ、深さ0.12ｍをそれぞれ測る。底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは急である。

微細な破片であるため図示し得なかったが、覆土中より、土師器の坏２点が出土している。

第２号土壙（第27図）

M・N−７グリッドに位置し、全体は長径径1.35ｍ、短径1.06ｍの隅丸長方形を呈する。深さは0.15ｍ前後で、底面はほぼ平坦である。

第３号土壙（欠番）

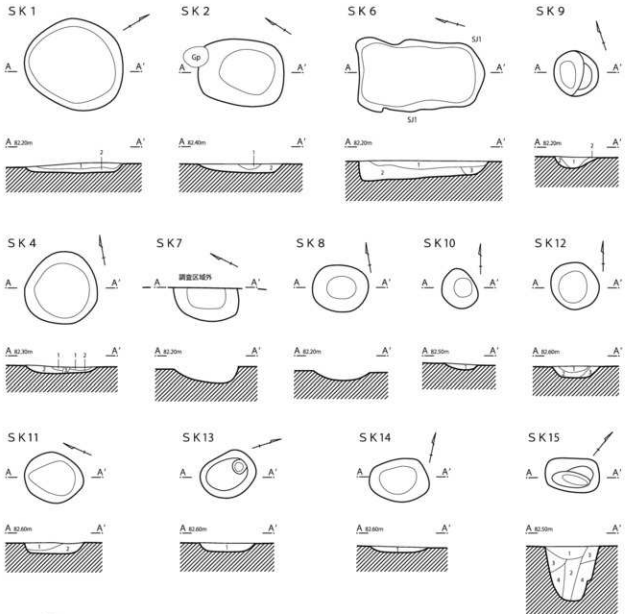
第４号土壙（第27図）

M−８グリッドに位置する。全体は長径1.16ｍ、短径1.15ｍの不整な円形で、深さは0.1ｍを測る。底面は概ね平坦である。

第５号土壙（欠番）

第６号土壙（第27図）

M−９グリッドに位置する。第１号住居跡の埋没後、カマドと床の一部を切って設営される。同住居跡床面での規模は南北1.95ｍ、東西1.15ｍ、深さ0.1〜0.3ｍである。底面は南から北へ向か



SK1
1　黒褐色土　ローム粒子少
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロックまばら　粘性やや有　フカフカの土

SK2
1　暗褐色土　ローム粒子やや多　フカフカ
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロックを全体に含む　フカフカ

SK4
1　黒褐色土　ローム粒子少　フカフカ
2　暗褐色土　ローム粒子まばら　ロームブロックまばら　フカフカ
3　褐色土　根の攪乱　フカフカ

SK6
1　黒色土　ロームブロック・ローム粒・炭化物少
焼土粒微量
2　暗褐色土　ロームブロック少　ローム粒やや多　炭化物ブロック少
3　暗褐色土　ロームブロックやや多　炭化物少

SK9
1　暗褐色土　ローム粒子微量、フカフカ
2　褐色土　ロームブロック少　ややしまり有

SK10
1　褐色土　ロームブロック多　フカフカ

SK11
1　暗褐色土　ロームブロック多
2　暗褐色土　ローム粒子少

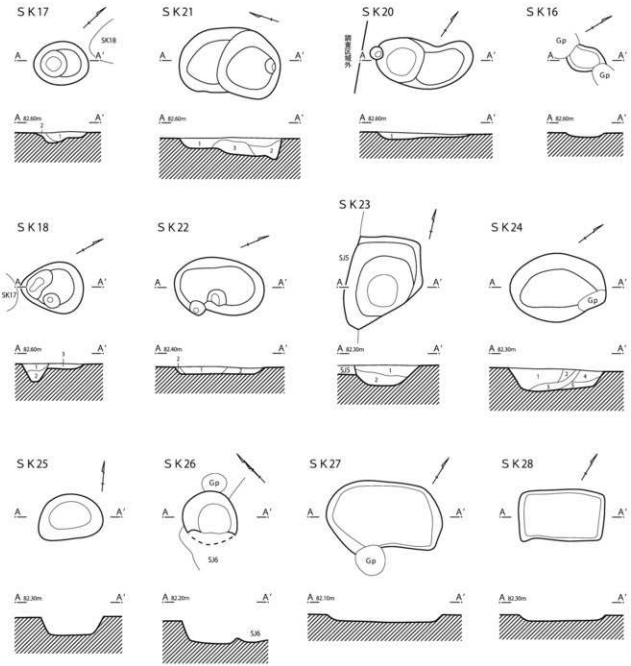
SK12
1　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少　フカフカ
2　暗褐色土　ロームブロック多　フカフカ
3　黄褐色土　炭化物粒少　くすんだローム　フカフカ

SK13
1　黄褐色土　くすんだローム　暗褐色ブロック少　フカフカ

SK14
1　黄褐色土　くすんだローム　暗褐色土を部分的に含む

SK15
1　黒褐色土　ローム粒子微量　ロームブロック少
2　黒褐色土　ローム粒子少　ロームブロックを点々と含む
3　暗褐色土　ロームブロック多
4　黒褐色土　ローム粒子・ロームブロックを全体に含む

第27図　土壙（1）



SK17
1　暗褐色土　ロームブロック少　フカフカ
2　暗褐色土　ロームブロック多　ややしまり有

SK18
1　黒褐色土　ロームブロック多　ローム粒子多　フカフカ
2　黒色土　ロームブロックまばら　フカフカ
3　暗褐色土　ローム粒多　ややしまり有

SK20
1　暗褐色土　ローム粒多　ややしまり有

SK21
1　暗褐色土　ローム粒子少　ロームブロック少　フカフカ
2　暗褐色土　ロームブロック少　フカフカ
3　暗褐色土　ロームブロック多　ややしまり有

SK22
1　暗褐色土　ロームブロック多　フカフカ
2　黄褐色土　暗褐色土をブロック状に含む　ややしまり有

SK24
1　黒褐色土　ローム粒少　炭化物やや多
2　黒褐色土（やや明）　ローム粒多　ロームブロック多　炭化物少
3　暗褐色土　ローム粒多　ロームブロック多　炭化物少
4　暗黄褐色土　ローム粒多　ロームブロック非常に多
5　暗褐色土　ローム粒多　ロームブロック非常に多　炭化物少

0　2m
1:80

第28図　土壙（2）

って傾斜しており、壁の立ち上がりは急である。

覆土からは、残存率の高い土師器の甕、ほぼ完形の須恵器の坏、緑釉陶器の破片などが出土している（第29図１～４）。これらの遺物から見て、本土壙の所属時期は11世紀代と考えられる。

第７号土壙（第27図）

L－８グリッドに位置する。東側は調査区外となるため、全体の規模や形状は明らかでない。検出したのは東西0.51ｍ、南北1.02ｍの範囲である。検出状態から見て、全体は楕円形乃至は隅丸長方形を呈するものと思われる。底までの深さは0.24ｍで、底面は丸味を帯びている。壁の立ち上がりは一様でなく、北側に比して南側は急である。

第８号土壙（第27図）

K－７グリッドに位置する。平面は整った楕円形を呈し、長径0.88ｍ、短径0.74ｍ、深さ0.13ｍを測る。底面は中央部に向かって僅かに傾斜し、横断面は皿状となる。

第９号土壙（第27図）

K－６グリッドに位置し、全体は径約0.7ｍの円形を呈する。底面は東半部より西半部が深くなり、0.18ｍを測る。

第10号土壙（第27図）

K－６グリッドに位置し、全体は長径0.65ｍ、短径0.54ｍの円形で、深さは0.08ｍである。壁の立ち上がりは緩やかで、横断面は皿状を呈する。

第11号土壙（第27図）

K－６グリッドに位置する。全体は長径0.93ｍ、短径0.8ｍの楕円形を呈し、深さは0.17ｍを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

第12号土壙（第27図）

K－６グリッドに位置し、南西に第11号土壙、北に第13号土壙、東に第14号土壙が隣接する。全体は径約0.75ｍの円形で、深さは0.19ｍを測る。底面は丸く、横断面は深めの皿状を呈する。

第13号土壙（第27図）

J・K－６グリッドに位置し、南側には第12号土壙が隣接する。全体は楕円形を呈し、長径0.9ｍ、短径0.7ｍ、深さ0.13ｍを測る。底面は平坦で、北端の一部が小ピット状に深くなっている。

第14号土壙（第27図）

K－６グリッドに位置し、西には第12・13号土壙が隣接する。全体は長径0.93ｍ、短径0.68ｍの楕円形を呈し、深さは0.07ｍに過ぎない。底面は平坦で、横断面は皿状となる。

第15号土壙（第27図）

K－６グリッドに位置し、平面は長径0.86ｍ、短径0.53ｍの楕円形を呈する。深さは最大0.85ｍを測るが、底面は一定せず段差を有している。壁の立ち上がりは急で、覆土に柱痕状の層が見られる。周囲に同様の遺構はないが、柱穴ではないかと考えられる。

第16号土壙（第28図）

J－６グリッドに位置する。検出範囲は長径0.6ｍ、短径0.4ｍで、平面は楕円形を呈する。深さは0.06ｍに過ぎない。

第17号土壙（第28図）

J－５グリッドに位置し、北東には第18号土壙が接している。上面は楕円形を呈し、長径0.87ｍ、短径0.68ｍ、深さ0.17ｍを測る。底面は段を有し、北側は５㎝ほど浅くなっている。

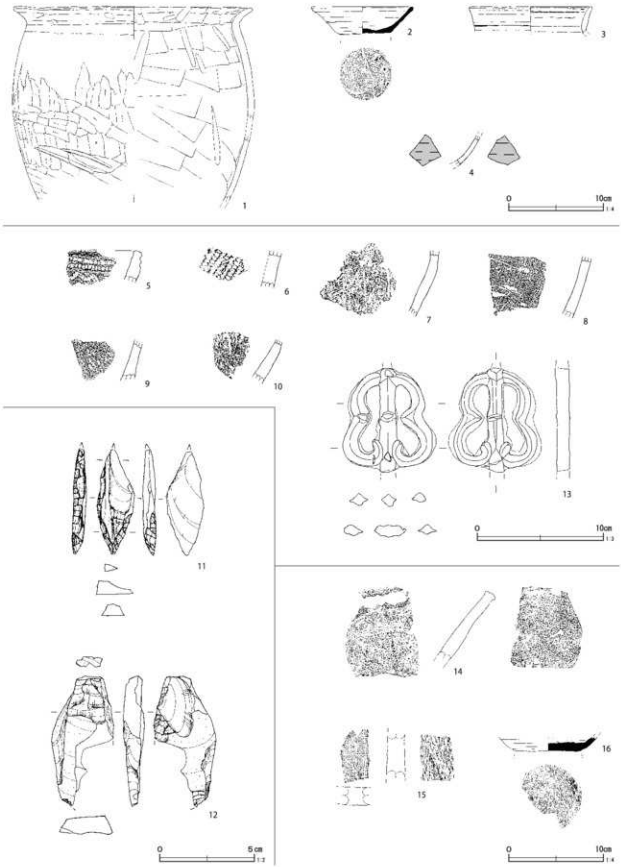
微細な破片のため図示し得なかったが、覆土中より、須恵器の坏１点が出土している。

第18号土壙（第28図）

J－５グリッドに位置し、南西には第17号土壙が接している。全体は長径0.99ｍ、短径0.75ｍの楕円形で、深さは0.08ｍを測る。南側は径0.7×0.5ｍ、深さ0.02ｍほどのピット状となっている。単一の土壙として扱ったが、土層断面図からも窺えるように、異なるピットが重複している可能性がある。

微細な破片のため図示し得なかったが、南比企窯跡産の須恵器坏が１点出土している。

第19号土壙（欠番）



第29図　土壙・ピット・グリッド出土遺物

第11表　土壙・ピット・グリッド出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置（注記番号）	図版
1	土師器	甕	25.0	(20.6)	－	CD	70	Ⅰ	にぶい橙	SK-6　№4・6・8・12・13	9-1
2	須恵器	坏	10.5	2.9	5.3	CDⅠ	90	Ⅱ	灰黄	底部回転糸切り　SK-6　№5	9-2
3	土師器	小型壺	(12.8)	(2.9)	－	BCD	口縁20	Ⅰ	橙	SK-6　№2	
4	陶器	椀	－	2.5	－	白胎	－	Ⅱ	－	東濃？　緑釉　SK-6　№11	9-3
5	縄文	深鉢	中期中葉（勝坂Ⅰ式）口縁部　口縁部直下に複数の角押文が巡る　表採								9-4
6	縄文	深鉢	中期後葉（加曽利Ｅ式）胴部　ＲＬ単節縦位回転の縄文が施文　SD-7								9-4
7	縄文	深鉢	後期　集合沈線文　表裏にヘラ状工具による粗い調整痕　F-4G　P-27								9-4
8	縄文	深鉢	後期　無文の胴部　表裏にヘラ状工具による粗い調整痕　表採								9-4
9	縄文	深鉢	時期不明　無文の胴部　10と同一個体と思われる　表採								9-4
10	縄文	深鉢	時期不明　無文の胴部　9と同一個体と思われる　表採								9-4
11	石器	ナイフ型	長さ5.6 cm　幅2.1 cm　厚さ0.7 cm　重さ6.29g							黒色頁岩　G-4G　№1	9-5
12	石器	剥片	長さ[6.9] cm　幅3.3 cm　厚さ1.0 cm　重さ16.69g							尖頭器の未製品か　J-5G　P-10	9-6
13	祠製品	錫杖頭	長さ8.2 cm　幅7.4 cm　厚さ1.1 cm　重さ119g							鋳造　三鈷未製品か　J-7G	9-7
14	陶器	擂鉢？	－	(7.4)	－	CD	－	Ⅰ	－	常滑　O-8G　P-1	
15	瓦	平瓦	縦5.0 cm　横3.3 cm　厚さ1.9 cm			CDH	－	Ⅰ	黄灰	南比金？　表採	9-8
16	須恵器	坏	－	(1.5)	7.0	CDH	底70	Ⅱ	灰黄	南比金　底部回転糸切り　底面外ヘラ記号　撹乱	

第20号土壙（第28図）

J－5グリッドに位置する。平面は長径1.51m、短径0.73mの甄箪型を呈し、深さは0.1mを測る。底面は緩やかな傾斜を有している。

第21号土壙（第28図）

J－6グリッドに位置する。全体は2基の円形土壙が重複したような形状ながら、土層観察では新旧の違いは観察できなかった。平面は長径1.61m、短径1mの楕円形となる。底面は段を有しており、深さは北側で0.16m、南側で0.28mとなっている。

第22号土壙（第28図）

J－7グリッドに位置する。全体は長径1.43m、短径0.87mの楕円形で、深さは0.11mを測る。底面は概ね平坦で、横断面は皿状を呈する。

第23号土壙（第28図）

G－4グリッドに位置し、埋没後の第5号住居跡東壁を切る。上面は東西1.2m、南北1.48mのいびつな台形だが、下位は1.1×0.88mの楕円形となっている。深さは0.33mを測る。底面は中央に向かって傾斜し、横断面は船底形を呈する。

第24号土壙（第28図）

F－4グリッドに位置する。平面は長径1.42m、短径1.11mの楕円形を呈し、深さは0.34mを測る。底面は平坦ながら、北から南へ僅かに傾斜している。壁の立ち上がりは急で、横断面は逆台形となる。

第25号土壙（第28図）

F－4グリッドに位置する。全体は不整な楕円形を呈し、長径0.98m、短径0.71m、深さは0.28mをそれぞれ測る。壁は平坦な底面から急角度で立ち上がり、横断面は逆台形となる。

第26号土壙（第28図）

E－3グリッドに位置し、第6号住居跡のカマドに切られる。全体は径0.85m前後の円形で、深さは0.46mを測る。底面は丸味を帯び、横断面は船底形を呈する。

第27号土壙（第28図）

E－4グリッドに位置する。グリッド・ピットと重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。全体は長径1.83m、短径1.05mの小判形で、深さは0.12mを測る。底面は概ね平坦ある。

第28号土壙（第28図）

F－4グリッドに位置する。平面は東西に長い長方形で、東西1.34m、南北0.83m、深さ0.1mを測る。底面は平坦で、横断面は箱型を呈する。

5．ピット

調査区からは、ほぼ全域にわたって多数のピットが検出された

調査時には、壁柱穴のように円形にまとまっている部分が見られることや、覆土が住居跡などの遺構と同様の黒色土であることなどから、縄文時代の住居跡となる可能性が考えられた。このため注意して精査を行ったが、炉跡や埋甕など、住居に伴う施設は何ら検出できなかった。

また、遺物はF－4 グリッドP27から縄文土器（第29図 7）、J－5 グリッドP10から尖頭器の未製品と考えられる黒曜石の剥片（第29図12）、O－8 グリッドＰ１から常滑焼破片（第29図14）それぞれ１点が出土したのみである。

よって、ここではグリッドごとに通し番号を付し、時期・性格不明のグリッド・ピットとして計測表にまとめた。

6．グリッド出土遺物

遺構確認時、G－4 グリッドでナイフ形石器１点（第29図11）が検出された。このため、旧石器時代の石器群の存否を確認すべく、出土地点を中心に試掘坑を設定してローム層を掘り下げたが、石器の出土は認められなかった。

また、調査区壁面（東壁）を精査中、J－7 グリッド部分から錫杖頭（三鈷）と考えられる銅製品（第29図13）が出土した。縁には鋳造時の「ばり」が残ったままで、表裏の合わせもややずれている。未製品であろう。出土層位は耕作土の下、抜根に伴って攪拌された土層中である。時期は不明確ながら、中世～近世のものと思われる。

このほか、縄文土器・土師器・須恵器・瓦・常滑焼の破片が少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示できたものは僅かである（第29図）。遺構出土の遺物と接合するものはなかった。

第12表　ピット計測表（1）

グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
D－4	1	52	46	79	F－4	5	48	37	24	F－5	11	50	44	24
	2	31	28	22		6	50	21	57		12	50	40	25
	3	25	20	36		7	49	(36)	20		13	44	43	56
	4	46	36	73		8	62	46	40		14	42	38	25
E－3	1	25	21	16		9	80	63	18		15	欠番		
	2	38	32	23		10	40	32	35		16	38	36	5
	3	48	39	24		11	30	29	21		17	48	38	24
	4	22	22	6		12	44	29	44		18	28	26	9
	5	26	26	27		13	84	51	16～32		19	51	47	14
	6	23	22	7		14	74	38	76		20	44	(30)	42
	7	46	42	37		15	42	34	22		21	33	31	25
	8	33	32	18		16	23	18	30		22	50	33	12～39
	9	52	45	34		17	38	35	52		23	52	41	31
	10	49	42	22		18	27	23	33		24	40	32	36
	11	31	30	27		19	105	43	23		25	55	28	9
	12	23	21	11		20	82	64	10		26	58	40	9
	13	29	28	24		21	43	36	18～40		27	29	24	34
	14	40	32	12		22	33	33	21	G－4	1	44	40	34
	15	44	41	26		23	34	30	26		2	33	29	14
	16	42	34	30		24	48	40	72		3	25	25	14
	17	31	29	12		25	54	46	14		4	39	39	22
	18	26	22	12		26	63	47	16～22		5	30	28	34
	19	36	33	12～37		27	30	27	38		6	34	25	17
E－4	1	28	25	24		28	35	26	19		7	22	20	32
	2	27	24	13		29	43	33	13		8	26	24	14
	3	22	20	11		30	欠番				9	53	27～32	49
	4	36	28	22		31	98	53	21～56～72		10	30	30	49
	5	22	20	17		32	44	43	30		11	35	34	9
	6	28	27	34		33	52	51	20		12	22	(14)	15
	7	42	36	12～19		34	47	37	38		13	30	(20)	26
	8	37	36	13		35	30	24	13		14	32	26	37
	9	29	28	25		36	28	26	11		15	29	28	22
	10	28	28	10		37	24	21	18		16	18	(16)	27
	11	46	40	18		38	50	40	67	G－5	1	32	30	19
	12	55	52	14		39	30	25	8		2	71	(46)	20
	13	56	48	11		40	36	34	25	I－5	1	30	27	56
	14	24	22	24		41	欠番				2	36	35	48
	15	欠番				42	欠番				3	35	28	23
	16	欠番				43	25	20	21		4	46	34	9～22
	17	50	42	13		44	46	39	75		5	34	23	62
	18	42	40	13		45	35	31	16		6	51	23	49
	19	30	28	24		46	40	23	10		7	70	42	49
	20	50	45	21		47	41	34	36～50		8	39	36	51
	21	32	30	23		48	44	34	45		9	欠番		
	22	37	34	17～31		49	52	32	24		10	37	36	39
	23	欠番				50	45	32	58		11	50	48	9
	24	欠番				51	38	(32)	31		12	34	34	35
	25	42	41	9		52	39	33	22		13	42	30	23
	26	48	46	28		53	45	34	40		14	37	33	16
	27	22	19	9		54	45	(27)	20		15	48	46	20
	28	38	37	16		55	34	27	18		16	30	30	29
	29	45	45	10		56	21	19	11		17	34	31	37
	30	21	19	7		57	32	29	42		18	42	33	24
	31	39	38	45		58	22	20	9		19	39	35	21
	32	38	38	16		59	(21)	(19)	35		20	34	32	15
	33	30	28	8		60	22	(21)	40		21	41	33	29
	34	51	46	32		61	32	24	16		22	43	36	36
	35	28	25	10		62	25	24	16		23	36	28	35
E－5	1	46	44	33		63	40	36	5		24	37	37	50
	2	43	33	31～45		64	42	28	75		25	18	18	6
F－3	1	72	58	15		65	42	34	16		26	30	26	7
	2	37	35	28		66	30	25	43		27	28	24	3
	3	72	44	20～26		67	34	24	—		28	20	29	15
	4	40	34	22	F－5	1	58	48	30		29	34	27	33
	5	32	26	29		2	80	74	13		30	28	22	17
	6	38	32	9		3	63	60	17		31	36	28	37
	7	43	26	30		4	43	34	30		32	22	18	19
	8	31	30	21		5	58	48	21		33	(19)	18	28
	9	20	20	21		6	35	35	37		34	33	(20)	32
F－4	1	60	(40)	19		7	欠番				35	28	20	7
	2	56	52	36		8	欠番				36	30	24	8
	3	39	32	26		9	56	53	20		37	29	25	11
	4	62	50	24～56		10	31	31	22		38	27	16	18～26

第13表　ピット計測表（2）

グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
I－5	39	107	39～59	19～21	I－6	73	50	40	62	J－6	41	32	29	10
I－6	1	49	46	17		74	(81)	40	15		42	32	30	20
	2	23	22	—		75	24	20	28		43	50	45	18
	3	24	23	20		76	40	35	5		44	44	40	20
	4	39	31	9		77	38	34	7		45	21	20	16
	5	51	49	72		78	34	25	38		46	42	36	16
	6		欠番			79	31	28	23		47	34	31	16
	7	44	40	7	J－5	1	43	40	12		48	43	30	25
	8	52	40	29		2	43	42	7		49	36	30	35
	9	42	39	36		3	21	19	16		50	66	60	27
	10	52	32	14～26		4	30	28	24		51	42	38	9
	11	45	31	15		5	37	25	12		52	51	46	11
	12	41	36	20		6	41	38	8		53	(22)	20	15
	13	28	26	39		7	28	28	14		54	62	59	8
	14	40	40	31		8	29	22	11		55	63	56	18
	15	45	41	29		9	24	20	37	J－7	1	28	26	36
	16	48	43	41		10	36	36	20		2	60	56	9
	17	36	32	17		11	27	26	44		3	30	27	21
	18	26	26	38		12	29	27	42		4	47	27	19
	19	36	27	23～41		13	29	26	17		5	28	28	43
	20	38	33	39		14	55	35	29		6	34	33	19
	21	38	32	41		15	33	34	16		7	43	35	27
	22	39	38	60		16		欠番			8	38	38	23
	23	42	39	17		17	37	29	24	K－6	1	25	24	27
	24	29	29	14		18	35	20	29		2	38	28	12
	25	39	36	10		19	50	44	14		3	36	33	11
	26	71	58	20		20	46	28	26		4	37	30	14
	27	36	25	30		21	46	33	36		5	40	38	9
	28	51	32	11		22	38	34	33		6	74	58	8
	29	16	15	8		23	48	40	12		7	22	19	31
	30	30	30	22		24	36	34	10		8	23	21	23
	31	36	36	35		25	35	30	23		9	18	13	21
	32	34	30	29		26	21	20	25		10	38	36	23
	33	54	58	29	J－6	1	24	22	28		11	38	28	21
	34	28	28	26		2	38	24	10		12	87	63	6
	35		欠番			3	48	35	57		13	50	41	19
	36	26	25	20		4	58	36	57		14	35	35	37
	37	36	26	49		5	22	21	37		15	39	31	18
	38	34	30	14		6	50	37	16		16	26	26	14
	39	40	39	15		7	39	32	20		17	35	33	13
	40	44	34	43		8	34	33	27		18	41	33	14
	41	37	31	15		9	35	28	15		19	39	27	32
	42	51	34	18		10	40	32	25		20	83	53	21
	43	31	31	17		11	32	31	21		21	58	42	55
	44	42	42	26		12	28	27	18		22	40	31	42
	45	44	40	50		13	30	25	23		23	33	29	13
	46	39	38	26		14	25	25	53		24	24	23	42
	47	32	26	36		15	30	28	24		25		欠番	
	48	22	20	23		16	36	32	30		26	50	37	24
	49	63	44	11		17	48	48	12		27	47	45	69
	50		欠番			18	40	36	18		28	28	24	37
	51	30	28	7		19	32	29	13		29	30	25	33
	52	33	30	26		20	40	35	14		30	58	46	37
	53	42	42	18～27		21	59	54	11		31	29	22	28
	54	36	35	36		22	21	20	23		32	48	41	45
	55	20	19	19		23	24	23	28		33	53	36	68
	56	26	22	30		24		欠番			34	22	22	38
	57	35	37	48		25	30	29	15		35	52	28	49
	58	45	42	38		26	28	28	20		36		欠番	
	59		欠番			27	37	30	29		37		欠番	
	60	27	26	40		28	28	28	10		38		欠番	
	61	68	57	22～52		29	36	22	37		39	26	20	25
	62		欠番			30	86	50	29		40	47	45	27
	63	36	35	39		31	26	20	37		41	26	23	18
	64		欠番			32	28	29	34		42	33	32	17
	65	35	31	10		33	44	41	13		43	21	18	24
	66	41	38	37		34	60	60	17		44	38	25	32
	67	36	34	3		35	46	32	24		45	61	50	12
	68	25	18	15		36	48	43	20		46	28	22	11
	69	54	31	23		37	24	22	31		47	50	30	27
	70	39	37	8		38	21	21	11	K－7	1	39	38	13
	71	22	21	11		39	20	16	7		2	37	32	10
	72	98	77	11		40	47	40	16		3	51	42	8

第14表　ピット計測表（3）

グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
K－7	4	58	44	12
	5	30	28	19
	6	40	35	50
	7	44	38	10
	8	32	26	9
	9	34	32	36
	10	27	22	36
	11	56	49	32
	12	34	31	34
	13	30	25	42
	14		欠番	
	15		欠番	
	16	58	32	25
	17	25	23	15
	18	41	39	15
	19	21	20	18
	20		欠番	
	21		欠番	
	22		欠番	
	23	34	25	17
	24		欠番	
	25	26	18	11
	26		欠番	
	27	41	30	44
	28	37	24	20
	29		欠番	
	30	28	23	16
	31		欠番	
	32		欠番	
	33		欠番	
	34		欠番	
	35		欠番	
	36		欠番	
	37	34	30	24
	38	28	25	23
	39	27	26	20
	40	26	24	22
	41	30	28	31
	42	30	26	17
	43	74	58	31
	44	24	20	33
	45	27	26	12
	46	33	32	18
	47	40	38	24
	48	35	33	16
	49	36	35	1
	50	29	29	15
	51	31	30	11
	52	32	30	12
	53	35	27	8
	54	20	17	7
	55	28	20	17
	56	29	28	9
L－6	1	65	50	30
	2	51	50	11
	3	36	34	13
	4	23	22	11
	5	40	30	16
	6	29	24	12
	7	20	14	8
	8	14	14	17
	9	32	24	18
	10	26	24	13
	11	29	21	11
	12	29	26	25
	13	24	26	19
	14	29	20	11
	15	35	34	6
	16	30	30	10
L－7	1	46	46	24
	2	46	38	17
	3	52	32	12
	4	20	17	7

グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
L－7	5	35	30	18
	6		欠番	
	7	20	18	12
	8	25	25	10
	9	15	14	17
	10	27	22	23
	11	50	34	36
	12	63	56	10
	13	22	21	7
	14	22	22	12
	15	18	12	13
	16	23	20	7
	17	22	16	6
	18	20	17	6
	19	31	28	6
	20	30	28	4
	21	30	24	20
	22	24	23	17
	23	19	16	10
	24	27	26	11
	25	17	17	9
	26	6	53	11
	27	36	26	15
	28	48	34	22
	29	79	53	10
	30	20	18	9
	31	18	18	9
	32	36	35	7
	33	26	25	13
	34	25	24	28
L－8	1	28	26	8
	2	23	18	23
	3	31	23	8
	4	28	24	20
	5	44	34	15
	6	34	33	16
	7	25	24	10
	8	24	24	9
	9	19	17	22
	10	24	23	10
	11	28	18	14
	12	28	26	23
M－7	1	31	28	19
	2	29	28	12
	3	18	16	3
	4	26	24	7
	5	24	19	9
	6	25	22	5
	7	52	38	12
	8	30	28	7
	9	33	31	3
	10	24	24	10
	11	36	30	10
	12	32	27	23
	13	26	26	10
	14	24	22	11
	15	25	22	10
	16	28	25	8
	17	29	28	10
	18	22	18	5
	19	24	20	17
	20	24	20	40
	21	30	22	17
	22	41	31	19
	23	28	20	25
	24	25	24	－
	25	19	18	－
M－8	1	30	20	10
	2	27	23	11
	3	20	16	7
	4	16	14	7
	5	63	55	22
	6	32	31	13

グリッド	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
M－8	7	30	28	32
N－7	1	27	25	19
	2	33	31	13
	3	45	44	4
	4	36	32	14
	5		欠番	
	6	28	26	13
	7	26	24	17
	8	33	28	13
	9	32	30	28
	10	22	19	11
	11	29	28	5
	12	38	36	9
	13	22	18	12
	14	40	32	34
	15	42	39	38
N－8	1	35	30	27
	2	33	30	17
	3	30	26	10
	4	42	32	10
	5	32	29	12
	6	39	30	16
	7	40	33	22
	8		欠番	
	9	28	26	20
	10	28	23	12
	11	15	14	21
	12	22	20	15
	13	50	33	29
	14	41	34	20
	15	40	39	16
	16	30	28	22
	17	29	29	17
	18	31	28	10
	19	52	48	29
	20	48	38	11
	21	63	41	39
	22	24	16	12
	23	28	18	9
	24	23	22	17
	25	34	31	15
	26	43	37	8
	27	31	25	10
	28	24	20	10
	29	37	29	15
	30	31	26	11
	31	30	26	5
	32	27	22	15
	33	40	35	16
	34	20	14	16
	35	30	24	17
	36	24	23	17
	37	34	28	23
	38	38	24	18
	39	18	15	31
	40		欠番	
	41	36	30	29
	42	36	27	14
N－9	1	30	28	16
	2	30	28	23
	3	32	31	28
	4	34	32	22

Ⅴ　調査のまとめ

1．調査の成果

今回、調査を実施した東原遺跡からは、住居跡10軒（縄文時代１軒、奈良時代３軒、平安時代６軒）・溝跡７条・土壙25基等が検出された。

奈良・平安時代の住居跡からは、土師器の坏・甕、須恵器の壺・甕・坏・蓋などが出土している。須恵器の大半は南比企・東金子といった埼玉県内の窯跡製品である。これら出土遺物の時期は、８世紀第Ⅲ四半期と、９世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期の２時期に大別される。

以下、調査で得られた成果を基に、主に奈良・平安時代の特徴についてまとめておく。

（1）遺跡の立地

東原遺跡は毛呂山町の中央部南端、葛貫地内に所在する。周辺は中小河川による開析が進行し、西から東へ、山地～丘陵～台地と急激に移行する変化に富んだ地となっている。

遺跡の立地としては台地（毛呂台地）上ということになるが、丘陵（毛呂山丘陵）に接する最も西端にあたるため、毛呂山町東部の平坦な台地部とは景趣を異にしている。

位置的には高麗川に合流する葛川の最上流部にあたり、台地は葛川とその支流に開析され、南西－北東方向に長い尾根状の小台地に分岐している。遺跡の乗る小台地の南北には、幅の狭い低地が入り込んでおり、対岸300ｍほどの小台地上には、やはり奈良・平安時代の集落跡である中尾遺跡（本遺跡と同様、飯能寄居線バイパス工事に伴って発掘調査を実施。平成23年３月末に報告書刊行予定）が存在している。

西方は急峻な山地が控えていることから、東原・中尾の両遺跡は、最も奥部に営まれた集落の一つということができる。高麗川・葛川下流に数多く分布する同時代の集落は、耕地となる広い低地をひかえた、標高の低い（55～45ｍ）平坦な台地上に立地している。これに対し、東原・中尾の両集落は、いずれも正反対の場所に営まれている。標高は高く（85ｍ前後）、低地との比高差も大きい（約８ｍ）。可耕地は少なく、台地の平坦面も狭い。集落立地としては、かなり特異というべきであろう。

（2）住居跡と集落

検出された奈良・平安時代の住居跡は９軒で、うち７軒は調査区北半部、他の２軒は南端部に分布している。但し、時代的な差異ではない。

平面形は、第１号住居跡のみ不整の長方形であるが、他は概ね方形を呈する。

カマドの構築される壁は、北が５軒、東と推定されるものが２軒、北と東の両壁に備えるものが２軒である。西壁から検出されたものはなかった。検出した８基のカマドはいずれも地山を荒掘りし、その後にローム・ブロックや小礫混じりの粘土を貼って構築している。調査区外となるため、第２号住居跡ではカマドが検出できなかったものの、覆土の状態から推して、やはり粘土を貼ったものと思われる。

住居跡の主軸方向は、おおよそ三つに分けられる。カマドが１基の住居跡では、これを南北に取るものが１軒、北西－南東に取るものが４軒、東西に取ると考えられるものが２軒である。２基備える第７・９号住居跡は北西－南東、あるいは北東－南西となる。

東原遺跡は台地平坦部に東西約300ｍ、南北約120ｍの範囲に広がっている。今回の調査はその

中央部を横断する形で実施したが、検出状態から見ても、住居跡群が調査区の東西両側に展開していることは明らかである。

調査の及んだ範囲内ではあるが、集落としては8世紀第Ⅲ四半期に形成され、のち一時廃絶、9世紀中葉に至り再び営村ということになる。

（3）高麗郡と東原遺跡

霊亀二年（716）、現在の日高市・飯能市を東流する小畔川（第2小畔川や南小畔川を含む）流域を中心とする地域に、新たに高麗郡が置かれる。

高麗郡建郡以前に希薄であった小畔川流域の遺跡分布は、奈良～平安時代を通じて激増する。また、郡内には、女影廃寺（官寺）、大寺廃寺（氏寺）、高岡廃寺（僧勝楽の菩提寺）が建郡間もない8世紀の前半～中頃、次々と建立されていく。

毛呂山町側の高麗川左岸、及び葛川流域でも前代の集落はほとんど見られなかったが、小畔川流域同様、高麗郡の設置を契機に集落の形成が始まり、平安時代にかけて急増していく様子が窺える。毛呂山町東部の平坦な台地上では、上殿遺跡・表A遺跡・表B遺跡・まま上遺跡・築地遺跡などが、丘陵から続く標高の高い台地上には東原遺跡・中尾遺跡などが、それぞれ形成されていく。これに対し、毛呂山町北方の越辺川流域は前代から開けた地域で、奈良・平安時代の集落は、古墳群の分布域と重なるように営まれている。

前者は新来の集団による新たな開発地域、後者は先住集団に継承された伝統地域ということになろう。毛呂山町一帯は入間郡高階郷に含まれると考えられているが、両者の間に高麗郡と入間郡の郡堺を想定することも可能ではなかろうか。

しかし、入間郡が高麗郡設置において管掌・保護育成の立場にあったという指摘もあるので、高度な技術を携えてやってきた高麗人の指導の下、入間郡が自ら、郡内の空閑地であった高麗川・葛川流域の開発へ乗り出したとことを示しているのかもしれない。

高麗川・葛川流域が高麗郡に含まれていたと断言はできないものの、先述のように、東原・中尾の両遺跡は、下流部のまま上・築地などの諸遺跡とは大きく隔たる環境下に営村されていることは看過できない。分布上もやや隔たっているなど、特異な一群を形成しているからである。

南西およそ1㎞という近距離には、高麗氏の氏寺と考えられる大寺廃寺が造営されている。大寺廃寺は8世紀第Ⅱ四半期の建立で、9世紀後半に本格的な瓦葺き寺院になっていったと指摘されている。東原遺跡・中尾遺跡からも瓦の出土がある。

両集落の形成はやや遅れるものの、ほぼ大寺廃寺の建立、また、伽藍整備の時期と重なる点は重要である。同廃寺の造営、伽藍整備に関与する集落だったのであろうか。

いずれにせよ、高麗川・葛川流域の新たな入植・開発が、高麗郡の動向と密接な関係を有していたことだけは確実である。

（4）その他

縄文時代

縄文時代の住居跡は、1軒が検出できたに過ぎない。遺物の出土はなかったが、住居跡の形状やグリッド出土遺物からは、縄文時代中期の可能性を挙げられる。

調査区内には全域にわたって小ピットが多数検出されており、一部は壁柱穴のように円形の配置を窺わせるものもあった。ただ、炉跡や壁溝などは確認できず、住居跡と認識できるものはなかった。また、調査区全体が開墾により撹乱されていたとはいえ、縄文時代の遺物は殆ど出土していない。従って、ピット群の一部は住居跡の柱穴となる可能性を残すが、大規模集落を想定することは不可能と思われる。

錫杖頭

抜根に伴って撹拌された土層中から、錫杖頭と考えられる銅製品が出土した。単独の出土で時期は不明確ながら、中世～近世のものと思われる。

縁に「ばり」が残ったままの鋳造品で、表裏の合わせもややずれている。未製品であろう。

錫杖は仏教法具の一つで、僧侶や修験者が持つ杖である。錫杖頭には 6 乃至12の小鐶を着け、これを鳴らす音によって障害や煩悩を払い、智慧を得ることができるとされている。調査では、小鐶らしきものは出土していない。

西方800mほどに天台宗薬王寺があるものの、東原遺跡の近隣に寺院の遺構、伝承はない。未製品であることからすれば、寺院よりも仏具製造に携わる鋳物師の存在を考慮とすべきだろうか。

毛呂山町西戸には、50石の寺領と150ヶ寺の配下を有する、山本坊という本山派修験の大寺が修験道禁止の明治元年まであった。錫状は修験者も携行するので、同寺との関わりも無視できないであろう。

引用・参考文献

蘆田伊人編　1963『新編武蔵風土記稿』第 9 巻　雄山閣
金子直行　2001『まま上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第242集
埼玉県　1986「小田原衆所領役帳」『新編埼玉県史』資料編 8　中世 4 付録
埼玉県教育委員会　1988『埼玉の中世城館跡』
埼玉県県史編さん室　1982『埼玉県古代寺院調査報告書』
埼玉県神社庁神社調査団編　1986『埼玉の神社　入間・北埼玉・秩父』埼玉県神社庁
埼玉県立図書館　1954『武蔵国郡村誌』第 4 巻
埼玉県立歴史資料館編　1982『埼玉県歴史の道調査報告書　県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書』埼玉県教育委員会
埼玉県立歴史資料館編　1983『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書　第 1 集　埼玉県教育委員会
佐藤春生　1995『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書（2）』毛呂山町理蔵文化財調査報告　第11集
佐藤春生　1996『毛呂山町上鳩遺跡』毛呂山町理蔵文化財調査報告　第12集
佐藤春生　1996『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書（3）』毛呂山町理蔵文化財調査報告　第14集
佐藤春生　2000『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書（5）』毛呂山町理蔵文化財調査報告　第20集
佐藤春生　2009『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書（6）』毛呂山町理蔵文化財調査報告　第22集
鈴木秀雄・富田和夫　1982『伴六遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第11集
大護八郎・高橋一夫　1978『高岡寺院跡発掘調査報告書』高岡寺院発掘調査会
中平　薫ほか　1982『大寺廃寺―第 1 次発掘調査概報―』日高市埋蔵文化財調査報告書　第 2 集
中平　薫　2003『常木久保・稲荷・神明』日高市埋蔵文化財調査報告書　第31集
日高市　1997『日高市史』原始・古代資料編
日高市　2000『日高市史』通史編
村木　功ほか　1983『伴六遺跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告　第 1 集
村木　功ほか　1985『大寺廃寺』毛呂山町埋蔵文化財調査報告　第 2 集
村木　功　1988『毛呂山町の遺跡―遺跡詳細分布調査報告書―』毛呂山町埋蔵文化財調査報告　第 5 集
村木　功　1990『毛呂山町町内遺跡郡発掘調査報告書Ⅰ』毛呂山町埋蔵文化財調査報告　第 7 集
村木　功・橋澤道博　1995『まま上遺跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告　第10集
山本　禎　2009『まま上遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第358集

写真図版

1　調査区南側全景（南東から）

2　第１号住居跡（南から）

3　第１号住居跡遺物出土状況（東から）

4　第１号住居跡カマド（南から）

5　第２号住居跡（西から）

6　第２号住居跡遺物出土状況（1）（南から）

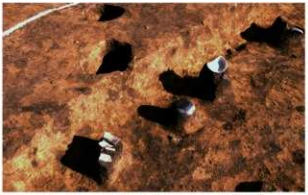
7　第２号住居跡遺物出土状況（2）（東から）

8　第３号住居跡（南東から）

図版 2

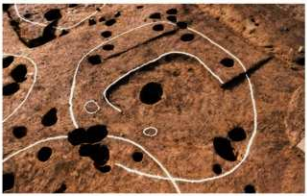
1　第３号住居跡カマド（南東から）

5　第５号住居跡カマド（南から）



2　第３号住居跡遺物出土状況（西から）

6　第６号住居跡（南から）



3　第４号住居跡（東から）

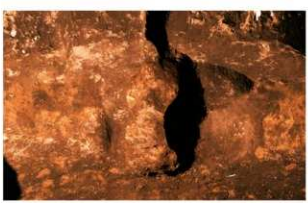
7　第６号住居跡カマド（南から）

4　第５号住居跡（南から）

8　第７号住居跡（南から）

1　第７号住居跡カマド１（南から）

2　第７号住居跡カマド１（掘り方）



3　第７号住居跡カマド２（西から）

4　第８号住居跡（南から）

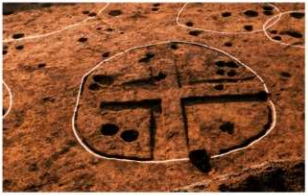
5　第８号住居跡カマド（南から）

6　第９号住居跡（南から）

7　第９号住居跡カマド１（南から）

8　第９号住居跡カマド２（西から）

図版 4



1　第 10 号住居跡（東から）

2　鍋杖頭出土状況（南西から）

3　D-4 グリッド土層断面（南西から）

4　第 7 ～ 9 号溝跡・第 1 号道路跡（1）（北西から）

5　第 7 ～ 9 号溝跡・第 1 号道路跡（2）（西から）

6　第 7 ～ 9 号溝跡・第 1 号道路跡（3）（北から）

7　第 7 ～ 9 号溝跡・第 1 号道路跡（4）（西から）

8　第 7 号溝跡土層断面（西から）

1　第１号住居跡（第９図１）

2　第１号住居跡（第９図２・３・５）

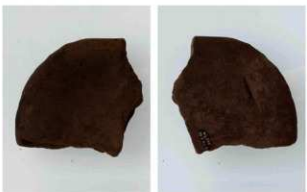
3　第１号住居跡（第９図４）

4　第２号住居跡（第 10 図２・３）

5　第２号住居跡（第 10 図５）

6　第２号住居跡（第 10 図６）

7　第２号住居跡（第 10 図７）



8　第３号住居跡（第 13 図 13）

図版 6

1　第 2 号住居跡（第 10 図 1）

2　第 2 号住居跡（第 10 図 4）

3　第 3 号住居跡（第 13 図 2）

4　第 3 号住居跡（第 13 図 3）

5　第 3 号住居跡（第 13 図 4）

6　第 3 号住居跡（第 13 図 6）

7　第 6 号住居跡（第 17 図 5）

8　第 7 号住居跡（第 18 図 1）

9　第 9 号住居跡（第 21 図 4）

10　第 9 号住居跡（第 21 図 5）

1　第 3 号住居跡（第 13 図 1）

2　第 3 号住居跡（第 13 図 5 ・ 7 ・ 8）

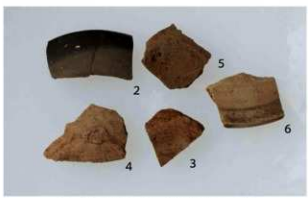
3　第 3 号住居跡（第 13 図 9 ・ 11）

4　第 3 号住居跡（第 13 図 10 ・ 12）

5　第 5 号住居跡（第 15 図 1）

6　第 6 号住居跡（第 17 図 1）

7　第 6 号住居跡（第 17 図 3）



8　第 7 号住居跡（第 18 図 2 ～ 6）

図版 8

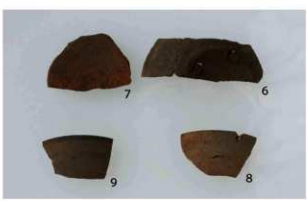
1　第 7 号住居跡（第 18 図 7）

5　第 9 号住居跡（第 21 図 1）

2　第 8 号住居跡（第 19 図 1）

6　第 9 号住居跡（第 21 図 3）

3　第 8 号住居跡（第 19 図 3）



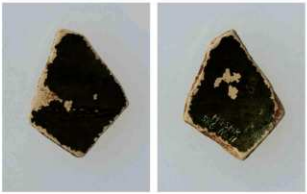
7　第 9 号住居跡（第 21 図 6 ～ 9）

4　第 8 号住居跡（第 19 図 4 ～ 7）

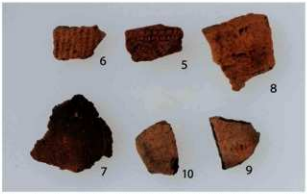
8　第 9 号住居跡（第 21 図 10）

1　第6号土壙（第29図1）

2　第6号土壙（第29図2）



3　第6号土壙（第29図4）

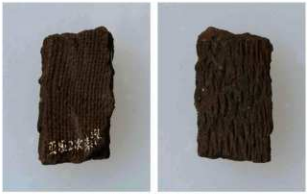


4　ピット・グリッド出土縄文土器（第29図5～10）

5　グリッド（第29図11）

6　グリッドピット（第29図12）

7　グリッド（第29図13）



8　グリッド（第29図15）

図版 10

1　第１号住居跡（第９図７）

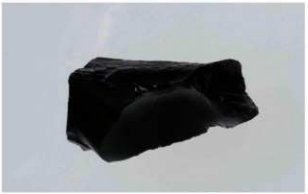
2　第２号住居跡（第 11 図８～ 19）

3　第２号住居跡（第 11 図 20 ～ 31）

4　第７号溝跡（第 26 図１）

5　第７号溝跡（第 26 図２）

6　第７号溝跡（第 26 図４）



7　第７号溝跡（第 26 図５）

8　第７号溝跡（第 26 図６）

報告書抄録

ふりがな	ひがしはらいせき
書名	東原遺跡
副書名	地方特定道路（改築）整備工事（主要地方道飯能寄居線）関係埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第378集
編著者名	鯏持和夫
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369−0108　埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1　　TEL　0493−39−3955
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
東原遺跡（ひがしはら いせき） 第1次調査	埼玉県（さいたまけん） 入間郡（いるまぐん） 毛呂山町（もろやままち） 大字葛貫（おおあざくずぬき） 463−1番地（ばんち）他	26	031	35°55′33″	139°19′21″	20010104 〜 20010228	1,500	道路整備
東原遺跡（ひがしはら いせき） 第2次調査				36°12′49″	139°18′44″	20091013 〜 20091030	148	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東原遺跡 第1次調査	集落跡	縄文時代	住居跡　1軒		表土層より旧石器時代のナイフ形石器、中・近世の銅製錫杖頭が出土。古代集落は大寺廃寺と関連か。
		奈良時代	住居跡　3軒	土師器・須恵器	
		平安時代	住居跡　6軒 土壙　1基	土師器・須恵器	
		中・近世	土壙　24基 溝跡　4条		
東原遺跡 第2次調査	集落跡	中・近世	溝跡　3条 道路跡　1条	土鍋・古銭	

要約

東原遺跡の所在する毛呂山町葛貫地区は、ほぼ関東山地と関東平野が接する部分に位置している。遺跡は南方を東流する高麗川の支流、葛川によって開析された幅の狭い毛呂台地上に立地する。調査では奈良・平安時代を中心とする集落跡が検出された。高麗川・葛川流域では先行する集落跡はほとんど見られず、奈良時代になって突如出現し、平安時代にかけて急増する傾向が認められる。これは、霊亀二年（716）、現在の日高市や飯能市を中心に設置された高麗郡の動向と一致する。本遺跡が高麗郡に包摂されるか否か、なお検討を要すが、集落の形成は同郡の設置と深い関わりがあると思われる。本遺跡の南西約1.2㎞には、高麗氏の氏寺とされる大寺廃寺が存在する。同廃寺からは多くの瓦が出土しているが、東原遺跡と南隣する中尾遺跡でも同時期の瓦が出土しており、その関連性が注意される。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第378集

東原遺跡

地方特定道路（改築）整備工事（主要地方道飯能寄居線）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成23年３月25日　印刷
平成23年３月31日　刊行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　埼玉県熊谷市船木台四丁目４番地１
0493（39）3955
http：//www.saimaibun.or.jp

印刷／関東図書株式会社